始

338-302

ルーチン

（浮草）

大正
3.10.7
交換

長谷川巳之吉 博文堂

露、イー、エス、ツルゲネフ作

日、二葉亭四迷譯

（二）

夏の靜な朝の事であつた。晴やかな空に日は最う高く昇てゐたが、野は冰た露に煌めいて、今しがた霧の霽れた谷間からは何處となく良い匂のする涼風が通つて、ぢつとり濡れた森の中には早起の小禽が面白さうに囀づる聲がする。稍花を持ち出した裸麥が裾から巔へ生上つた平な岡の上に小村が見える。今其小村を

差して狹い田舍道を辿つて行く若い女があるが、見れば、白地のモスリンの服を着けて、圓い麥藁帽子を冠つて、手には傘を持つてゐる。其後から離れて傭男が伴をして行く。

女は逍遙を樂むでゐるかの樣に緩々行く、道傍の背の高い裸麥がそよ〳〵と風に靡いて大紆曲にうね〳〵となる時、薄綠の浪が淡紅い浪を追つて走つて、中空には雲雀が啼渡る。若い女は此處からは十町もある自分の持村を出て、今向うの小村へ往かうとしてゐるのであるが、名をアレクサンドラ、バーロウナ、リービナと云つて、後家で、子のない代り、なか〳〵の財產家で、弟のセルゲイ、バーウルイチ、ワルィンツォーフといふ非役の陸軍中尉と一所に生活してゐる、ワルィンツォーフは未だ獨身で、姉の財產を預つて其世話をしてゐるのである

アレクサンドラは小村まで來て、一番端の古い低い小舍の前に立止つたが、傭男を招寄せて、內へ入つて、其家の家內の容體を尋ねさせると、程なく白い髯の生えたよぼ〳〵した老爺を連れて出て來た。

「どんなだね？」とアレクサンドラが聞くと老人は漸く

「まんだひくら〳〵しちよりまする……」

「入つても可いかえ？」

「可うがんすとッて。入らッしやりませ。」

て、小舍の內へ入つた。內は薄暗くて、息氣苦しいやうで、烟が籠つてゐる。……誰やら臥暖爐の上でむく〳〵と動いて唸るものが

ある。振向いて見ると、碁盤縞の布で包んだ黄ばむだ皺だらけの老婆の首が薄々見える。老婆は厚ぼつたい毛布を胸まで掛けて、癯せこけた腕を力無げに投出して、切なさうに息氣をしてゐる。

アレクサンドラが其側へ寄つて、額に手を觸れて見ると、炎えるやうに熱い。

「どんなだね、マトリョーナ？」と臥暖爐の上へ屈みかゝつて聞くと老婆は其面を凝然と目戍めて、うゝむと唸つて、

「駄目だアよ、奥様。最うお迎が來たでがんすよ。」

「其様な事はない、屹度癒るよ。アノ藥を贈したが、お服りかえ？」

老婆は悲しげに呻いたばかりで、何とも返答をしない。聞取れなかつたものと見える。

「頂きましてがんすよ、」と戸口の所に立つてゐた老爺が答へる、

アレクサンドラは振返つて、「お前の外には誰も附てゐないの？」

「小女を附けときまする——孫でがんすが、なか〳〵附いとりましねえ。始終遊びに出かけまするだ、お轉婆だもんだけんね。老婆が水を飲みたいとッても、面倒がりまするし、私い老人の事だけん、役にや立たず、ほんに手の甲ばう摩りまするだ。」

「内の病院へ入れては如何だらうね？」

「無駄でがんすよ。どうせ、お前さま、おッ死ぬもんだものをや。えら、永生のウしましたアけん、大方天父のお迎に御座らしたんだんべえちふますことよ。臥暖爐を降りることもなんねえだ。何で病院さ往かれるもんで！動かして見なさろ、直ぐおッ死ぬべえ

から。」

「う、う、うむ」と病人は呻いて、「奥様よ、私イ死んだら、孫女イ孤兒だア。面倒見てやつて呉れさッせえよ、私等が旦那は遠方だけんど、お前様ア……」

ト云ひさして口を噤む。最う云はれなくなつたのである。

「心配おしてないよ、悪いやうには爲ないから。それはさうと、お茶とお砂糖とを少しばかり持つて來たからね、飲みたくなつたら飲んでお呉れ……。湯沸は有るだらうね？」ト老爺の面を見る。

「湯沸てがんすか？　湯沸は有りましねえけんど、借りて來ますべえ……」

「そんなら借りて來ることにおし、内のを贈しても可いけれども。

それから、孫女に命けて些と側に居させるが可いよ。遊びに行くなんて、そんな事はないッて。」

老爺は何とも云はずに、兩手を出して、茶と砂糖の紙包を受取る。

「そんなら、マトリヨーナ、私は最う歸るよ。また來るよ。あんまり僟々思はないで、精出して藥をお服り……」

老婆は少し頭を擧げて、身を捩つて、「奥様、お手を頂かして呉んなさろ。」ト口の中で云ふ。

けれど、アレクサンドラは手は出さずに屈みかゝつて、老婆の額に接吻した。

出がけに老爺に對つて、「大事にしてお呉れ。藥は書いてある通りに屹度服せてお呉れ……それから、お茶もね。」

老爺は此時も何とも返答をせずに唯辭儀をする。

戸外へ出れば、爽然とするやうである。傘を開げて出懸けやうとすると、ふと小舍の横手から、鼠色のコロミヤンカの故外套に同じ樣な帽子を冠つた三十ばかりの男が競馬車に乘つて出て來た。アレクサンドラを見ると、急に馬を駐めて、此方を振向いた其面を見れば、血の氣の薄い大きな面で、蒼味がゝつた鼠色の小さな眼で、白ッぽい髭を生してゐて、着てゐる衣服の色に副つた面色である。氣の無さゝうに莞爾として、「お早う。何の御用で？」

「おやまア、レジチフさん！病人の見舞に來たの……貴下は何處へ？」

レジチフと云はれた男はアレクサンドラの面を覗込むで、又莞

爾として、「病人の見舞に？　それは御奇特な。だが、寧そ病院へ入れたら如何です？」

「でも、大病ですからね。手が附けられないの。」

「貴女の所の病院は取拂ひますか？」

「取拂ふ？　何故？」

「何故でもないが。」

「奇異のねえ！如何して取拂ふだらうなどと思ひなすつたらう？」

「でも貴女はダーリヤさんと親密で、少し感化てゐませう？　ダーリヤさんは病院や學校はくだらない、餘計なものだと云つて居るぢやありませんか？　慈善も教育も公然しては不可皆精神的

の事業だから……とか何とか云つてゐるさうぢや有りません
か？　誰の口眞似でせう？」

アレクサンドラは笑ひ出した。

「ダーリヤさんはそれは發明な方だから、私も尊敬してゐますわ、
それに愛ですわ。だつて、彼方だつて思違ひはないとは云はれな
いから、仰しやる言を一々信用はしませんわ。」

「それなら可いですな、」とレジチフは云つたが、まだ馬車に乘つ
てゐる。

「彼人は自分で自分の言ふ事を餘り信じてはゐないですからな。
兎に角、好い鹽梅にお目に懸つた。」

「何故ね？」

「何故ねといふ挨拶が有るもんですか、貴女に逢つて厭な氣持の
する奴はない。今日は別して爽然した面色で鮮かですな。宛て
今朝の天氣といふものですな。」

アレクサンドラは又高笑をした。

「何が可笑いです？」

「何がッて、貴下！　貴下の面を御覽なさい。氣の無い、冷い面色を
して、そんなお世辭を云つて。能く終に欠が出ませんでしたね。」

「冷い面色……貴女は何でも火でなければ夜も日も明けんで
すな。けれども、火といふ奴は仕方がないものだ、パッと炎上つて、
烟が起つて、消えて了ふばかりです。」

「其代り暖まります。」

「其代り火傷をします。」

「火傷をしたつて可うございますわ。そんな事は些とも恐れないわ。それでも矢張何よりは……」

「如何だか！　一度こんがり火傷を爲たら然うは仰しやるまい、」と氣短に云ひ放しながら鞭て馬を撲つて、

「左樣なら、」

「一寸！　此度は何時入らッしやる？」

「明日。賢弟に宜しく。」

ト馬車は去つて了つた。

アレクサンドラは後を見送てゐたが、心の中で「宛て袋だよ。」成程、帽子を阿彌陀に冠つた其下から黃色い縮毛が蓬々と漏出して、

塵塗になつて、背を圓してゐる所は如何見ても大きな粉袋である。

アレクサンドラは徐に家路を辿た。俯向いて歩いて行くと、蹄の音が間近に聞えたので、立止つて面を揚げて見れば、弟が向から馬に騎つて來る。それと並んで乙な上衣の胸を開げて、乙な頸巾をして、乙な鼠色の帽子を冠つて、手に細いステッキを持つた、背の低い若い男が來る。アレクサンドラは考へながら歩いてゐたので、それとは少しも氣が附かないのは別つてゐながら、若い男は其姿を見ると、まだ遠方から笑ひかけて、此方が立止まると、直ぐ側へ來て、さも嬉しさうに殆ど舌足く

「お早うございます。御機嫌よろしう。」

「おや、バンダレーフスキイさん！　お早うございます。ダーリ

ャさんの御用て？」

「お察しの通り」と云つて莞爾となつて、主人の用て參つたのて、貴女をお尋ね申したのてございます。結構なお天氣だのに、一里ばかりしかない所てございますから、歩いて參りましたが……參つて承れば、お留守て。御舍弟樣に承りましたが。セミョーノフカへお出て遊ばしたのださうてございますな？　恰ど御舍弟樣も田圃へお出ましになる所てございましたから、御一所にお迎に參りましたが……へ、へ、好い所てお目に懸りました。」

若い男は純粹の露西亞語て、訛らずに物を云ふけれど、其音は如何も外國人らしい――尤も何處の者とも定めかねるが、面相を看ると、何處か亞細亞人らしい所がある。通つた段鼻て、飛出した儘、

て固まつた樣な大きな眼て、眞紅な厚唇に低い額、松脂のやうに黑い頭髮――何を見ても東の產らしいけれど、名はコンスタンチン、ヂオミーヅイチと云つて、オデッサの者だと云つてゐる。其癖ペロルシャの何處かて去る慈悲深い金滿家の後家に養はれたのてあるさうだか。それとは別人の去る後家の世話て役に就いたこともある。一躰年增連は皆此男を最負にする、それといふも、然うした人の機嫌を取つて、それに取入るのが上手てあるからてある、今もダーリヤ、ミハイロウナ、ラスンスカヤといふ金滿の女地主の所に養子とも附かず、食客とも附かず、厄介になつてゐるのてある。なか〳〵如才がなく、愛想も善くて、物事に感じ易くて、それて內々好色な、好い音聲の、可なりピヤノも彈く男てあるが、話をする時に

は相手の面を凝然と視詰る癖がある。衣服持が善くて、いつも清潔にしてゐる。大きな顋を鄭寧に剃て、頭髪を綺麗に撫附てゐる。

アレクサンドラは話の終るのを待つて弟に對つて

「今日は色々な方にお目に懸るよ。今もレジチフに逢つたの。」

「レジチフに！　何處かへ出懸ける所でしたか？」

「然うてせうよ。面してね、まア如何だらう、競走馬車に乘つて、だぶ〳〵した衣服を着て、塵だらけになつて……ほんとに彼人も餘程奇人だよ！」

「奇人と云や奇人かも知れないが、兎に角好い漢だ。」

「何方て？　レジチフさんてございますか？」とバンダレーフスキイは何か驚いたやうな面をする。

「然うてす、ミハイロ、ミハイルイチ、レジチフの事て」、とワルインツオーフは答へて、更に姉に對つて、

「ぢや、これてお別れだ。私はこれから田圃へ往かなきやならん。蕎麥の種蒔をしてゐるから。貴姉はバンダレーフスキイさんと御一所にお歸なさい……」

と云ひ棄てゝ駈を追つて往く。

「これは難有い！」と仰々しく云つて、バンダレーフスキイは腕を持つて來る。

アレクサンドラは手を渡して、二人連立つて住宅の方へ歩き出した。」

アレクサンドラを連れて行くのがバンダレーフスキイには恐ろしく嬉しいと見え、莞爾々々しながら徐々歩いて行く。其亞細亞風の眼を見ると濡みを持てゐる位、尤も是は珍らしからぬ事で、此男は何ぞと云と直に感動して涙ぐむ。然し、誰にしろすらりとした美しい若い女に腕を借て厭な心持のする者はあるまいから、其も其筈か。アレクサンドラの美しいのは縣下一般の評判であるが、成程その評判の通り、活々とした鳶色の眼で、黄ばむで薄白く光る頭髪で、むつちりした頬に靨が寄る。其他數へ立てれば未だあらうが、通つて少し上反つた鼻、それ一つでも、大丈夫、男を迷はすけれども、何よりも一番好いのは其面色で、美しい中にも毒の無い溫順しい開け放の所があつて、人の心を動かす、奪ふ、小兒のやうな

眼付をして小兒のやうに笑ふので、方々の夫人たちも淡泊してゐるよと云はれる……、これて未だ不足なら、それは慾といふものである。

「では、ダーリヤさんの御用て入らしッたのですね？」とアレクサンドラが重ねて聞くと、

「左樣てございます」、とバンダレーフスキイは答へる、ずの音を妙に氣取て。「えゝ、あの、何てございます、貴女に今日是非御夜食を喫りに入らしッて下さるやうに、是非お願ひ申して來いと申すことで……珍客が有りますので、是非御紹介いたしたいと申すことて。」

「何方、お客といふのは？」

「ムッフェーリとか申して、男爵の侍從さまで、ベテルブルグからお出になつたのでございますが、主人は此頃ガーリン侯の所でお相識になつたのださうて、大層稱めてゞございます。お若いが、敎育がお有ンなすつて、大層愛想の好い方ださうて。此方も矢張文學といふよりは……ア、美しい蝶々！御覽遊ばせ……

といふよりは經濟學でございませう、修つてをられるのださうてございますが、何やら面白い論文をお書きになつたとかて、主人の批評を聽きたいと仰しやるさうて。」

「論文の？」

「何さ、文章の批評でございますよ、文章の。文章に懸けては主人も、御承知てもございませうが、黑人てございますからな、ジウコフスキイも文章の事ては相談相手にされたさうてございます。それに、これも私の御恩を戴いた方てございますが、オデッサのロクソラン、メヂアローウイチ、クサンドルイカ、最う御老體てございますが、えらい方て……貴女も多分御存知て入らッしやいませうな？」

「いゝえ、聞いたこともありませんよ。」

「御存知ない？　これはまたり、如何したもんてございませう！まア、何に致せ、そのロクソラン、メヂアローウイチも、主人の露語に精しいことには大層感服してをられましたやうな譯て。」

「その男爵といふのは衒學者ぢやありませんか？」

「いや、左樣な方ではないさうてございます。主人の話ては、反つ

て、見るからが才子々々した方ださうで。ベトホーウェンの事を大層面白くお話になつて、侯爵様すらお浮れ遊ばしたと申すことでございますがこれは手前も何卒伺がひたく思ひます。矢張手前の細張内の事でございますからな。へ、へ。いや、美しい花がございます、如何でございます、差し上げましやうか？」

アレクサンドラは花を貰つて、少しすると、遺して了つた。家までは二十歩よりはあるまい。大きな明るさうな窓を附けた新築の家が苦醍樹と楓の古木の繁の中に白々と主待貌に見える。

パンダレーフスキイは心を籠めた贈物の身の果を見て、少し不興氣な躰であつたが、

「では御返事は何と申しませう？　お出で遊ばしますか？　御舍

弟様にも是非お出で下さるやうに願ひ置きましたが……」

「伺ひませう。ナターリヤさんは如何してゐます？」

「ナターリヤ様てムいますか？　お異りもムいませんが……」

シカシ、歸りまするには、この後方の所を曲りませんではなりませんが、最う通り越しましてムいますから、これで御免を蒙ります。」

アレクサンドラは立止まつて

「然うですか。お寄なさいましな。」

と思ひきり悪く云ふ。

「難有ございまするが、主人がタリベルグの新曲を聽きたいと申しましたから、餘り後れましては——些と復習つて支度をしておきませんでは、何でございますから。それに、手前風情がお饒舌を

致したのでは反つて五月蠅うございませうから。」

「いえ、そんな事は有りませんがね……」

パンダレーフスキイは溜息をして、思入十分に俯向いて暫く默つてゐたが、軈て左樣ならばと、一歩退つて辭儀をする。

そこで、ト、アレクサンドラも會釋して歸つて行く。

パンダレーフスキイも家路を辿り出したが、其顏を見ると、今までの憂鬱は急に引込むで、威張つた、どころか、殆ど憐愍な面相になつてゐる。歩き振までが變つて、今は大股にヅシリ〳〵と歩いて行く。細い杖を氣無しに揮廻しながら、十八九町も來ると、路傍に一寸姿色の美い百姓の娘が燕麥の中から穗を逐出してゐる。それを見ると、パンダレーフスキイは急に又莞爾となつて猫のやう

に靜と側へ寄つて、物を云ひかけた。娘は初の内は默りて、面を赧めて、笑つてゐたが、其内に袖を口元へ宛てゝ、横を向いて、

「彼方へ行かッしやいよ……好かねえ旦那さアだよ……」

パンダレーフスキイは一寸指で威嚇す眞似をして、それからワシリョークの花を摘つて與れろと云ふ。

「何にするだアね？　環でも作らッしやるのけえ？　私ィ厭だア、彼方イ往かッしやいてば……」

「これさ、まア其樣な事を云はずに、お聽きよ……」

「厭だア、彼方イ往かッしやいよ。そら、若樣が御座らしつた。」

振返つて視ると、成程ワーニャにペーチャと云ふダーリヤの子供達が駈けて來る、その後から抱の教師のバシストフといふ書生

上りの、今歳廿二になる、若い男が隨いて來る。パシストフは背高で、淡泊した面相で、大きな鼻に厚唇豚の眼の樣な眼付で、醜くてのつそりした男であるが、人が善くて、正直である。衣服にも關はず、髪をも斬らずにゐるが、洒落で然うしてゐるのではない、無精からで。無暗と口を可愛がつて、眠ることも好きな代り、面白い書物を讀んだり、身を入れて話をしたりすることも好きで、心底からパンダレーフスキイを憎むでゐる。

子供達はパシストフに狎いて吾佛と崇めて居る。其他の家内の者ども、パシストフは心易くしてゐる。これが主人には餘り快としない。常々舊弊な事は爲んと云つてはゐる樣なものゝ。

パンダレーフスキイは「坊さん、お早う！今日は大層早く運動に

出懸けましたね！　僕は」とパシストフの方に向いて、「最う大分歩いた。如何も景色が好きでね。」

「然うさ、君の景色を見てゐる所は善く見えた。」

「君は實に俗物だ。最う異う感ぐッてゐる。何せ君はさうだよ！」

パンダレーフスキイはパシストフ風情の者に對ふと、直に憤る而してその音を判然強く發す。

「道が分らなくなつて、聞いてゐたのかい？」

と左右を顧みながら、パシストフが云ふ。パンダレーフスキイが直と面を見守めてゐるので、甚だ厭な心持がするのである。

「君は如何しても俗物といふに過ない。何を見ても屹度俗な所

を目附け出さなければ承知しないのだ……」

「さア、坊さん！」と不意にバシストフが號令を掛けた。向うの原に灌木が見えるでせう、彼處まで競走して行きませう、誰が一番に達くか。宜うございますか？ワン！ツー！スリー！」

子供は一生懸命に駈出す。バシストフも續いて駈けて行く……

「下司め！」とパンダレーフスキイは肚の裏で思つた、子供を不行儀にして了ふ、全くの下司だ！」

で、得意氣に自分の粧した清潔した服裝を視廻して、平手で二度ばかり上衣の袖を彈いて領を振つて、而して歩き出した。歸つて來て、室へ入ると、古びた房衣に着改て、心配さうな面色をしてピアノの前に坐つた。

（二）

ダーリヤ、ミハイロウナ、ラスンスカヤの住宅は縣下でも一二を爭ふ程の者である。石造の大厦で、ラストレーリの繪樣に基いて昔風に建てたもので、巍然として岡の上に聳えてゐる、その据には中露西亞でも名ある川が流れてゐる。主婦のダーリヤも名の聞えた人で金滿家で、亡なつた夫は樞密顧問官をしたものである。

パンダレーフスキイは歐羅巴でダーリヤを識らぬ者はない樣に云つてゐるけれど、歐羅巴では餘り識つた者もない、ペテルブルグですら左程羽振の善い方でもない、其代りマスクワでは誰一人識らぬ者もなく、皆出入をする。多く上流社會の者と交際をして、少

し奇癖が有つて、餘り人の好くない方であるが、恐ろしく賢い女と名が通つてゐる。若い頃は大層美しくて、詩人が詩を贈るやら、若い男が戀れるやら、高位顯官の人が附廻すやらしたものであるさうだが、それも最う二三十年も前の事で、今では昔の面影だに殘つてゐない。「年寄でもない癖に、こんなに癯けて、黄ろくなつて鼻の尖つた女でも、一度は美人であつたこともあるのか！」歌にまで唱はれたのは此女か！」と誰も始ての者は異しむで、竊に人の世の頼み難いことを嘆ずる位である。尤もバンタレーフスキイは眼が今だに恐ろしく美いと云ふけれど、歐羅巴でダーリヤを識らぬ者はないと云ふのも此人であるから、餘り寃にはならぬ。

ダーリヤは毎年夏になると子供を連れて、（ナターリヤと云つて

今年十七になる娘を頭に、九歳と十歳と男の子が二人、都合三人あるが）それを連れて持村へ歸つて來る。而して公然に暮す男といふ中にも獨身者と多く交際をして。地方産の貴夫人達は七里けつぱいだと云ふ。其代り其連中からは恐ろしく惡く云はれる、ダーリヤと云ふ女は傲慢で、不品行で、恐ろしく我儘者で第一、その話を聞くと、時々ハツと思ふ程厭らしいことをいふなどゝ云はれる。成程ダーリヤも田舍では餘り氣を置かぬ。繕ひ氣なく憚らず振舞ふ所を見ると、郡の立者が周圍の名も知れぬ賤婦を輕蔑む色がほのめかぬでもない……町方の相識に對つても、心置きなく、幾分か茶かし加減に待遇ふ、けれどもこれは輕蔑むのではない。一躰自分より身分の卑い者の前でおそろしく打寛ぐ者に限つ

て、身分の上の人の前へ出ると、打寛がぬものである。これは如何した譯てあらう？　併し、こんな不審を起したとて、何の益にも立たぬことである。

バンダレーフスキイが漸くタリベルグの新曲を復習ひ果て、面白い綺麗な我室を出て客間に降りて見ると、最う家内の人々は寄集つてゐる。ソロン會が始まつてゐるのである。主婦のダーリヤは大きな臥椅子に憑つて、足を縮めて、手に新版の佛蘭西の小本を持てゐる。窓の側には縫架を中間に相對にナターリヤと女教師の Mlle Boncourt（マドモアゼル、ボンクール、）とが座つてゐたが、此女教師といふのは今まで男を持たずに押通して來た六十ばかりの干竟びたやうな老婆で、鼠色の頭巾を冠つて、兩方の耳に綿花を挿むでゐる。隅の戸の側

にはバシストフが座つて新聞を讀んでゐる。その側にはペーチャとワーニャが將棋を弄してゐる。暖爐の前には蓬々とした白髪頭の、色の淺黒い、黒眼勝のきよと〳〵した眼の、背の低い男が兩手を後に廻して立つてゐる。是はアフリカン、セミヨーヌイチ、ビガーソフとかいふ男で。

此ビガーソフといふのは妙な人である。凡そ世の中のものといふ中にも女が殊に嫌ひで、朝から晩まで女の惡口をばかり云つてゐる、巧く剣るともある代り、また愚にも附かぬことをいふこともあるが、いつも當人は何處か面白さうである、大人氣ないほど腹立ぽくて、肝癪が全身に充滿としてゐるやうである。ダーリヤはビガーソフが來ても惡い面をしな

い。といふのも畢竟は此男の惡口を云ふのを可笑い事に思ふからてあらうが、成程一入の慰みになる。何でも彼でも誇大に言做すのが此人の病で、例へば、雷が落ちて一村全燒となつたと云はうが、水が水車場を浸したと云はうが、百姓が斧で自分の手を切斷したと云はうが、如何な凶事災難の話をしても、いつも肝癪の塊を擲出したやうに、其女は何者だと云ふ。其災難を惹起した女は誰だといふ意であるが、如何な災難でも、起因を糺せば、皆女から起つた事だと思つてゐるから、其樣な事を云ふのである。或時さる貴夫人が強て呼んで馳走をしやうとしたところが、左程心易い關係でもないのに、ビガーソフは蒼皇其前に膝を折つて、殆ど泣かぬばかりになつて、其癖滿面に怒氣を帶びて、何卒勘辨して下さい、何も惡

い事をした覺えはさら〳〵ありません、最う是からは忘れてもお宅の閾は跨ぐまいから、など〵云ひ出したといふことである。又或時馬が山を駈下りるとてダーリヤの抱へ洗濯女を大溝へ放込むで、半死半生の目に逢はしたことがある。其からはビガーソフは此馬の噂をすると、必ず天下の名馬だと云ふ、此山や大溝の噂をすると、必ず風景絶佳の地だと云ふ。けれども、ビガーソフは不運の人である——尤も求めて不運になつたやうなものでもあるが。家は隨分困窮であつた。父はいろ〳〵の職に就いてゐたが、いづれも薄給で、先づ文盲の方であつたから、餘り息子の教育には心を留めず、ほんの手足を延ばしたとけのとである。母親とても甘やかすばかりの事であつたが、これは早く死んで了つた。それゆゑ

ビガーソフは自分の才覺て修業したやうなもので、郡立の學校を出てから中學へ入つて佛獨語は勿論羅典語まで學んて、優等の證書を貰つて卒業して、それからデルプトへ往つて、始終貧に責められてゐたが、それでも如何にか斯うにか三年の學期を辛抱し通した。儕輩絶れて才のある譯ではないが、辛抱强く强情なと云つたら一通てない、殊に名譽心が熾て、運命に逆らつても歷々の仲間入がしたい、人に輸けたくない、といふ意氣込てある。怠らず學問するも、デルプトの大學へ入つたのも、皆名聞を求むるからのとてある。貧乏なのが心外でならないので、自と觀察が利いて狡猾なる。一風變つた物言方て、若い頃から氣短な焦燥つたやうな一種の辯を持つてゐる。考が別段秀てゝゐるではないが、其口の聞き

方を見ると、尋常才氣があるどころてない、さも〳〵才氣がありさうてある。學士候補になつてから、學問に身を委ねやうと決心した他の事では到底も朋友に及ばぬと悟つたから、ビガーソフは成べく身分のある者を擇んて朋友にして、巧に其風を眞似て、諂ひさへしてゐた、其癖始終惡口ばかり云つてはゐたが。けれども明白に云つて了へば、學士になるには學力が足りなかつた。學問が好きて勉强したのではないから、實の所は餘り學識もない。それて試問の時に甚く失敗つたのに引替へて、同室の一學生は才のない男て、始終ビガーソフの嘲笑物となつてゐたけれど、規則正しい確乎した教育を受けてゐたので、旨く行つた。ビガーソフは此失敗から業を煮して、書物も手帳も火に燒べて了つて、役に就いた。初

の内はまづ首尾が善かつた。官吏としてはなか〳〵役に立つ事務を執るのが大して巧いのではないが、極めて自信が強くて活潑である。けれども早く游ぎ出したいと思つたばかりで、種々な事情に絡められて躓いて、到頭餘儀ない仕合で非職になつた。幸ひ小さな村を買つて持つてゐたので、三年ばかり其村に雌伏つてゐる中に、自墮落な茶かしたやうな風の香餌で、さる金滿家だが、ねツから教育のない女地主を釣つて、俄にそれと結婚した。けれども、ビガーソフの心も最う劫を經て甚くこぢれて來たので、夫婦暮しも餘り面白くない所へ、搗てゝ加へて、妻が幾年か共棲をした上句、竊にマスクワへ往つて、夫が家を建たばかりの持地面を何とかいふ山師で煮ても燒いても喰へない男に賣つて了つたので、ビガー

ソフも此重ね〳〵の不幸に腹の最底から業を煮して、妻を相手取つて訴訟を起さうとまでしたが、それほどまでに爲てみても、何の效もなかつた……それからは獨身で世を渡つて、隣歩きばかりして、影でなら未しも、眼前でも惡口を云つてゐる。近所の人も此男が來ると、無理笑をして紛してゐるが、眞に怖ろしく思ふのではない。ビガーソフは最う書物を手にも取らん。小作は百人ばかりもあらうが、孰も左して貧乏てもない。

パンダレーフスキイが客間へ入ると、ダーリヤが

『A! Constantin!（パンダレーフスキイを謂ふ）Alexandrine（アレクサンドリーズドラを謂ふ）は來るかえ？」

「宜しく仰しやいました。是非伺うと仰しやいまして。」と愛想善く彼方此方へ辭儀をしながら、爪を三角に尖らした太い白い手

て、念入に梳した頭を撫でる。

「ワルインツォーフも來るかえ？」

「入らッしやいます。」

「では、何ですか、」とダーリヤはビガーソフの方を振向いて、「女の子は皆不自然だと仰しやるんですか？」

ビガーソフは唇を捩曲げ、肱を突張つて、焦燥つた聲で物を云ひ出した、甚く焦燥つと、徐々と明瞭云ふのが此男の癖がある。

「まア、概して然うですな。勿論此處にお出でなさる方の事を云ふのではないが……」

「でも、此處に居るのも然うなんでせう？」

「此處にお出でなさる方の事は如何とも云ひません。けれども、

概して女の子は極て不自然です――物の言方が不自然を極めてゐる。例へば、驚くにしても、喜ぶにしても、また悲むにしても、必ず先づ斯ういふ風に氣取つて身體を曲げて（と厭らしく身を捩つて手を啓げて見せて）而して大層らしく「あらッ！」といつたものです、てなければ泣くとか、笑ふとかするものです。然し私は（と云つて自分一人でさも面白さうに莞爾として）さる甚い不自然なお孃さんに自然な取繕はない聲を出させたことがある。」

「如何してね？」

ビガーソフの眼は爛々としした。

「白楊の杖で後から横腹を引撲いたんです。すると、キャッと云つたから、善哉……それこそ自然の聲だ、取繕はずに聲を出すと

然ういふ聲が出る。以來は然ういふ聲をお出しなさい。と云つてやりました。」

皆笑ひ出した。

ダーリヤは「まさか！　誰が、そんな、杙や何かで女の子を撲つものがあるもんですか！」

「いや本統です。杙で引撲いたんです、而も太い奴で、籠城の時敵を防ぐに用ゐるやうな、彼樣な奴で。」

「Mais C'est une horreur ce que vous dites là, monsieur. まア大變な事を伺ふもんだといふ程のこと」と云ひながら M-lle Boncourt が笑ひ仆ける小兒等を睨廻す。

「僞だよ、ボンクールさん！　こんな出鱈目を云ふのが此方の癖さ。」とダーリヤが勸解める。

ビガーソフは平氣なもので、

「僞なら、僞にしてお置きなさいだが、實際の話です。私が自分で做たんだもの、間違ふ筈がない！　それを本統になさらん位だから、到底も信用はなさるまいが、お隣のチエプーゾワ、エレーナ、アントーノウナね、彼人が自分の口から、可うがすか、自分の口からてすぜ、實の甥を殺したと私に白狀した。」

「また出鱈目！」

「まゝ、お待ちなさい。話を悉聽いてから何とても仰しやい。私は何もチエプーゾワを讒謗したいことは些ともない。それどころか、私は彼人が好きな位だ、尤も好きだと云つても女の事だから際限が有るが。彼處へ往つて御覽なさい、家中搜したつて書物と

云つたら、暦の外にや何も有りやしません。書物を讀めばと云つても、彼女は默つては讀めない――讀むと、汗が潤むで、後で眼がしよぼ〳〵すると云ふ。どうも善い人です。それに、彼家の小間使は皆肥滿だ。何で惡く云ひたいもんですか！」

「斯うお株が始つては、晩まで止む氣遣はない。」

「お株か……而し、女のお株は三つありますな――而も始終云ひつづめて、眠た時の外は止めない。」

「三つとは？」

「先づ厭味さ、それから諷刺に譴責、」

「何て貴君は然う女が憎いのでせう！　屹度女に……」

「痛い目に逢はされたことが有るだらう……ですか？」

ダーリヤはビガーソフの妻の亂行を憶ひ出したので少し面を食つた……何も云はずに唯點頭いて見せると、

「成程、私を痛い目に遭はした女が一人ある、人の善い女でしたがな、極く人の善い女だつたが……」

「誰でせう？」

「お袋です」と小聲に云ふ。

「母樣が？　母樣が如何して痛い目に遭はしたんです？」

「私を產んだからさ……」

ダーリヤは眉を寄せた。

「何だか話が理に落ちて來ましたね。Constantin、タリベルグの新曲を彈いてお聞かせな。ピヤノでも聽いたら、ビガーソフさんも

我を折んなさるかも知れない。オルフエイは猛獸をさへ鎭めたといふから。」

バンダレーフスキイはピヤノに對つて新曲を彈いたが、仲々巧くやつた。ナターリヤは初の內は耳を澄して聽いてゐたが、其內に又仕事に掛つた。

「Merci, c'est charmant.（離有、面白かつたといふほどのこと）本統にタルベルグは面白いIl est si distingué.（名曲だといふほどのこと）ビガーソフさん何を其樣に考へてゐらッしやる？」

ビガーソフは沈着き拂つて、

「考へて見ると、利己主義と、いふにも三通りありますな。自分も善いことをするが、人にもさせるのと、自分ばかり善い事をしたがつて、人にはさせないのと、自分も善い事をしない代り、人にもさせないのと三通り……女の利己主義といふのは大抵此最後の奴ですな。」

「痛く仰しやるねー　でも貴君は感心だよ、ちやんと然う確定て了つて、御自分の思ふ事に思違はないやうな面をしてゐらッしやるから。」

「誰が思違がないと云ひました？　思違は私だつて爲ますア、男にだつて有りますア、けれども、我々男の思違と女の思違とには雲泥の相違がある。解りませんかな　解らなければ、かうです。例へば男なら二二ンが四といふ所を五とか三と半分とかいふかも知れんですな、所が女なら二二ンが脂蠟燭。」

「それは最う此前も一度伺つたことが有るやうですね。だが、まア、それはそれで宜しいとして置いて、それだから今の曲が如何だと仰しやるんです？」

「如何だともいふんではないのです、私はピヤノなんぞは聽いてゐなかつた。」

「どうも、貴君は何ですのね、到底も心は岩が根の動かすべくも、ですね」、とグリボエードフの詩を捩て、「音曲もお厭なら、一體何がお好き？　文學ですか？」

「文學は好きですな。尤も近頃のは不可。」

「何故？」

「かういふ理由です。私先達て去る紳士と乘合てオカの渡を渡

つたことが有つたが、船が斷岸の所へ着いたので、馬車は皆手て昇いて揚げなければならん。ところが、紳士の馬車は非常に重いので、船頭が汗水くになつて、それを引揚げてゐると、紳士は船の中で、うん〳〵、云つてゐる、見てゐるも氣の毒な程唸つてゐるのです……

……これこそ分業法の新適用だ！　と私も思つた。今の文學も宛てこれですな。人が大騒をやつて事業を爲てゐる、文學者はそれを見てうん〳〵、云つてゐる。」

ダーリヤは微笑した。

ビガーソフは仲々默らない、

「而してそのうん〳〵いふのを今の世態を描くのだといふ。公共の問題に深く同情を表するのだとか何だとか、彼だとか……

いや、御大層なとをいふ！」

「女は――貴君は痛く攻撃を爲さるけれども――女は其樣な事は云ひませんね、それだけは……」

ビガーソフは首を縮めた。

「云へないから、云はないのでさ。」

ダーリヤは少し面を赧らめた。

「そろ〳〵失禮なことを言出しましたね！」と苦笑ひする。

一座寂然として了つた。

子供の一人がふとバシストフに

「ゾロトノーシヤといふのは何處？」

「バウターフスカヤ縣さ」、とビガーソフが代つて答へた。「ね、そら、

ホフランヂヤに在る。」話を變へる機會を獲たので、内々喜んでゐるのである。「今も文學のお話が出たが、若し私に不用な金でもあつたら、直ぐと小露西亞の詩人になりますね。」

「どうしてね？　好い詩人が出來るだらう！　それに、小露西亞の言語も御存知ないのでせう？」

「少しも知りません。其樣なものは知らなくても可い。」

「知らなくても可いとは？」

「知らなくても可いでさ。何の造作はない、紙を一枚持つて來て、上の方に世迷言と書いて、それから斯ういふ風に書出すでさ、さて、も命は難面ちものよ、とか又は夢の浮世に生存へてとかして、それから、我や鴉よ、朝夕ぎや〳〵啼ち暮ちゆ、とか何とか書るてさ。そ

れ詩が出來る。そして、印刷する、出版する。然うすると、小露西亞の人は其を讀んで、感心して、泣く、泪脆い人達ですからな。」

バシストフが大きな聲で、

「誰が、貴君！　そんな、貴君！　途方もないことを仰しやる！私は小露西亞に居たこともあるし、一躰小露西亞が好きです。彼地の言語も知つてゐますが……そんな、鴉だの、ぎや〳〵啼ち暮ちゆだの――そんな事を云ふもんですか。」

「それは然うかも知れんが、兎に角小露西亞の人は泣きます。それに、君は彼地の言語と云はれたが、一躰小露西亞の言語といふものが有りますか？　私は曾て小露西亞の者に遭つた時、卒然書物を開けてみたら、命限り根限り斬つて斬つて斬り立つればといふ

文句が有つたから、それを彼地の訛に直させてみた。然うした所が、此樣な風に直したんです。命かぢり、根かぢり、ちッて、ちッて、ちりたてばッ……これでも言語てせうか？純粹の言語と云はなければならんなら、私は寧ろ首を縊つて死んで了ひます！」

バシストフは何か反駁を爲やうとするとダーリヤが、

「打棄てお置きなさいよ。どうせビガーソフさんの口に掛けたら、鷺も鴉になつて了ふんだから。」

ビガーソフはニヤリと笑つた。折柄僕が來てワルインツオーフ姉弟の來たことを報せたので、ダーリヤは起上つて迎へた。

「Alexandrine」と側へ寄つて、「どうも、まア、善く來て下すつたねえ……

……ワルインツオーフさん、善うこそ。」

ワルインツオーフはダーリヤの手を握つて、それからナターリヤの側へ往つた。

「如何てせう、お知己の男爵殿は今日來られるてせうか？」とビガーソフが聞く。

「お出なさるてせうよ。」

「大變な哲學者だといふぢや有りませんか？恐ろしくヘーゲルを振廻す人てすとな？」

ダーリヤは之には何とも答へず、アレクサンドラを臥椅子に坐らせて、自分も其側に坐つた。

ビガーソフは未だ止めない。

「哲學か……高尚な見地……この高尚な見地といふ奴が至極癪に觸る奴だ。高い處から見たら、何が見えませう？　馬を買ふと云つて、望樓へ登つて眺める奴はありやしない！」

「男爵さんが何だか論文を持つて入らッしやるさうてすね？」

とアレクサンドラが問くと、ダーリヤは然も平氣な風で、

「はア論文をね露國に於ける商工業の關係を論ずとかいふ……ですが、大丈夫！　此席て讀みはしませんよ。それを讀むと云つてお招き申したんぢやないからね。Le baron est aussi aimable que savant.（男爵は學者てゐながら如才ない人てす）それに露西亞語は巧いてすよ。C'est un rrai torrent....il vous entraine.（それこそ懸河の辯て……聽いてゐると感心してしまひますよ）」

「佛蘭西語て褒められる程、露西亞語が巧いのだ」とビガーソフが口小言のやうに云ふ。

「仰しやい〳〵、たんと仰しやい……貴君の蓬頭にはそれが恰ど似合ふから。だが、何故かう遅いのだらう？　どうです、皆さん」と座中を見廻して、「庭へ出やうぢやありませんか？……まだ食事には一時間も間があるし、それにお天氣が好いから……」

皆起上つて庭へ出懸けた。

庭は河岸まで續いてゐたが、黄ろい香の高い菩提樹の古木を並木のやうに植駢べた薄暗い細道が幾條も附いてゐる、樹は木杪ばかりに日を受けて、エメラルドの玉を躍らしてゐる。アカチャ連翹などの四阿屋が遠近に見える。

ワルインツォーフはナターリヤや M-lle Boncourt も連立つて庭の奥の方へ入つて往つた。ワルインツォーフとナターリヤとは

默然て並んで行く、少し離れて後から M-lle Boncourt が行く。

「今日は何をして居らしつた？」とワルインツォーフが到頭口を切つた、赤茶けた髭の頭を撚りながら。

ワルインツォーフの面相は姉に酷肖てあるが、姉ほど面色に生死がない。美しい愛嬌のある目差てあるが、何處となく憂を含つてゐる。

ナターリヤは、「何も爲ませんだつたわ。ビガーソフさんの惡口いふのを聽いたり、刺繍をしたり、書を讀むだりしたばかりて。」

「何をお讀みなすつた？」

「アノ……十字軍の歴史を」、と少し吃つて云ふ。

ワルインツォーフはナターリヤの面を凝然と視て、

「十字軍の？　面白いでせうな。」

細い木の枝を折つて、くる〳〵廻し出したが、二十歩ばかり行くと、また、

「御母様の相識にお成なすつた男爵といふのは如何いふ人ですか。」

「侍従とかで、旅の方ですの。Maman は母はなり大層稱めて。」

「御母様は勤もすると浮かれる。」

「まだ氣は若いのですね？」

「然うです。あ、それから、貴嬢の馬ね、直に返しますよ。最う大抵慣れましたが、まだ直ぐ駈が迫ない。けれども、其内に屹度追はして見せます。」

「Merci. 有難……ですが、お氣の毒ですねえ、そんなにお手が懸つては……馬を慣らすのは大變困難といふぢやありませんか？」

「貴嬢の爲なら、私は……私は……これしきの事を……」と言ひ淀む。

ナターリヤは柔しい眼でワルインツオーフの面を見て、また Merci と云つた。

ワルインツオーフは久らく言淀むでゐたが、頓て、

「私は如何な事だつて……併し、云ふがものはない、貴嬢は御存知の筈だから。」

其時家の内で鐘が鳴る。

「Ah ! la cloche du diner ! rentrons. （や、御飯の鐘が鳴つた、家へは入りませうといふ程の）」と M-lle Bon-

courtが云ふ。

二人の後に隨て看樓の段を上りながら老婦が心の中で「Quel dommage que ce charmant garçon ait si peu de ressources dans la conversation……」と思つたが、之を露西亞語で云つたら、お前さんは可愛らしいが、少し氣が利かないね、とでもいふのであらう。

男爵は食事になつても來ぬ。半時程も待ぼけをした。卓に對つても、談話が一向ゆかない。ワルインツォーフはナターリヤの隣に坐つて其面をばかり見てゐる、而して傍から水を水呑に注いてやつてゐる。パンダレーフスキイは隣席のアレクサンドラを欺待つ積りて愛想だら〳〵てゐるけれど、可憫さうに、敵手は欠びをしないばかりてある。

パシストフは麵包て丸藥を拵へてゐて、餘念はない。ビガーソフさへ默つてゐるので、ダーリヤが今日は貴君は大變無愛想だと云ふと、怖ろしい面をして「私の愛想の善かつたとがありますか？そんなお愛想なぞは私には出來ない……」と苦々しさうに云つて、「まア、最う些との辛抱だ。どうせ私は尋常の露西亞人だが、お客樣の侍從さんは……」

「おや、おかしい！」とダーリヤは大きな聲を出して、「ビガーソフさんは妬るのだよ。手廻しの善いことねえ、まだ來もしないのに！」

けれどもビガーソフは何とも答へず、唯額越に睨めてゐる。

七時が鳴る。皆客間に戻つた。

「來ないかしら」とダーリヤが云ふ……

途端に車輪の音がする。見れば、小さな旅馬車を邸内へ乗入れるものがある。暫らくすると、僕が銀の皿に手紙を載せたのを持つて客間に入つて來て、主婦に渡す。ダーリヤは一通り手紙を讀下すと、僕に對つて、

「此手紙を持つて來た方は何處に入らつしやる？」

「まだ馬車に入らッしやいますが、お通し申して宜しう御座いますか？」

「お通し申してお呉れ。」

僕は出て行く。

ダーリヤは座中の人々に對つて、「どうもまんの惡いこと！」男爵は急にペテルブルグへ喚戻されることになつたさうですよ。

それで、ルーヂンさんとかいふ御朋友が論文を持つてお出なすつたのですがね、男爵は大層此方の事を稱めて、是非私に紹介したいと云つてお送しなすつたんださうですよ……併し、如何も不可いことねえ！最とお出なさるだらうと思つたら……」

「ドミートリイ、ニコライチ、ルーヂン」、と僕が披露する。

入つて來たのを見れば、年頃卅五六の、背の高い、少し猫背で、縮毛の、色の淺黒い男である。男前が好いのではないが、締つて活々とした面相で、鋭い青黒い眼にしつとりと光を持つて、徹つた大きな鼻で、唇はクッキリ際立つてゐる。着てゐる衣服も左まで新しくもなく、而も窮屈さうで、着た儘成長したとても云ひさうである。

つとダーリヤの側へ來て、一寸會釋をして、兼てお目に懸りたく思つてゐたこと、友人の男爵が暇乞に參ることが出來んのを痛く殘念がつてゐました。などと云ふを聞けば、細い聲で背の高い胸の廣い人に似合はぬ聲が出る。

「如何ぞ、まア、お掛なすつて……善うこそ」とダーリヤも云つて、座中の人々に紹介してから、土地の者か、旅の者かと聞く。

ルーヂンは帽子を持つた手を膝に措いて「私は何縣の者で、此頃當地へ參つたのです。少々用事が有つて參つたのですが、用の濟むまでは町方に逗留して居らうと思ひます。」

「町は何處に？」

「醫者の家です。彼男は大學に居た頃からの舊い朋友ですから。」

「はア、然うてございますか。醫者も大層評判の好い方で、療治が巧いさうですが……、アノ何でございますか、男爵さんとは舊いお知己てゐらつしやいますか？」

「いや、なに、此冬マスクワで相識になつたのですが、此頃も一週間

ばかり彼人の宿に居りました。」

「發明な方ですね――男爵さんは。」

「然うです」

ダーリヤは香水に浸した手巾の匂を嗅いて、

「貴下は御奉職爲すつて居らつしやるのですか？」

「私ですか？」

「はア」

「いや……非役です」

と談話が中絶れる。それからは皆思ひ〳〵に話し出した。

ピガーソフがルーヂンに對つて、「男爵さんは論文をお贈しなすつたさうですが、如何な事が書いてあるか、貴下は御存じですか？」

「知つてゐます」

「その論文といふのは露西亞の工商業……ぢやない、商工業の關係を論じたものだとか……ねえ、御主人、然うでしたな？」

「はア、商工業の關係を」と云つて主婦は手を額に加る。

「勿論私は然ういふ事には暗い方ですが」とピガーソフは言葉を繼いで、併し、論文の題からして如何も何ですな……婉曲に云つたら、何と云ひますかな？……如何も非常に漠然として……ソノ……錯雜してゐますな。」

「如何いふ譯で？」

ピガーソフは莞爾としてダーリヤを尻眼に懸けたが、また狐面をした我が顏をルーヂンの方へ振向けて、「貴下には明瞭ですかな

？」

「私にですか？　明瞭です。」

「ふむ……然うですかな。」

「頭痛でもなさるんですか？」とアレクサンドラがダーリヤに問ねる。

「いえ、なアに、何でもないのですよ……C'est Nerveux すわ」

「何んですか」、とまたピガーソフが鼻聲で始める。

「御朋友のムッフェーリ男は……確か、然う仰しやッたですな？」

「然うです。」

「ムッフェーリ男は專門に經濟學を修て居られるのでせうか、それとも又公務の片手間に、經濟學は面白いと云ふので、修て居られるのでせうか？」

ルーヂンは凝然とピガーソフの面を目守めたが、「いや好きて修てゐるのです」、と云つた其時の面は少し赧らむてゐた。「けれども、此度の論文には至當な議論も耳新らしい說もなか〳〵有ります。」

「肝腎の論文を讀まんから、何とも云ひかねるが……併し、いづれ何てせうな、事實よりか大摑みの議論が多いでせうな？」

「事實も有るが、事實に基いた議論も有ります。」

「な、成程。併し、私の考では……私も、かう見えても、三年デルプトに居つた者でがすが……私の考では、所謂全躰論とか、假定說とか、系體とかいふ其樣なものは……私は田舍漢だから艶氣な

く云つて了ふが……何の役にも立たんもんですな。唯智慧を揮廻すばかりの事で――人を惑はすに過ん事て。事實を傳へれば、それて澤山てす。」

「然うてせうか！」とルーヂンが反駁した。「事實の意味を說くといふことも必要てないてせうか？」

「全躰論か！」とピガーソフは自分の云ひたい事ばかりを云つてゐる。「や、全體論てござるの、觀察てござるの、結論てござるの、いやはや堪つたもんぢやない！ それが皆所謂主義から割出したものです。猫も杓子も各自に己が主義を揮廻して、擔廻る、剩に人にまて强賣をする……いやはや堪つたもんぢやねえ！」

とピガーソフは無暗に首を振立てる。バンダレーフスキイは

笑ひ出した。

「宜しい！」とルーヂンが受取つて、「ては何てすな、貴下のお考ては、主義といふものは無い？」

「有りませんとも――有る譯がないてす。」

「それが貴下の御持論てすな？」

「左樣。」

「それても主義は無いもんてすか？ それが即ち主義といふもんぢや有りませんか？」

座中の人皆微笑して眼を視合した。

「てすが……それは然うてすが……」

とピガーソフはあせりだす。ダーリヤは手を拍つて、

「これは可かつた！　ビガーソフさんも一本參つた！」と云つて竊とルーヂンの持つてゐた帽子を取る。

「お待ちなさい、まづお待ちなさい、」とビガーソフは口惜しがる。えらさうな面をして揚足を取つたばかりぢや濟まん、理由を言はなければ不可、議論を駁さんければ不可……議論の趣意が其方退けになつてゐる。」

ルーヂンは落着き拂つて「宜しい。何でもない事です。貴下は全躰論は役に立たんと仰しやる、主義なぞは信じないと……」

「信じません！　信じませんとも、何も信じません！」

「面白い！　即ち懷疑論者である。」

「そんな學者めいた言葉を用ゐるにや當らんと思ふが、併し……」

「まア、默つて結局までお聽きなさい、」とダーリヤが制する。

「よいや、殘つた！」とバンダレーフスキイは云つて、齒齦まで出して莞爾とする。

ルーヂンが「併し私の思ふ所を云へば懷疑論者である。懷疑論者で貴下にお解りになれば、然う云つても差支ないぢや有りませんか？　で、貴下は何も信じないと仰しやる……それなら、何故事實をお信じなさる？」

「何故と云つて、貴下、そりや……仕方がない……事實は事實でさ、事實を疑ひやうはない……事實が事實でないかは經驗で判ります、自分の感覺で。」

「ですが、その感覺に誤がないと云へますか？　感覺で考へれば、

太陽は地球の周圍を回るやうてある……併し貴下はコペルニクスの説に御同意てないかも知れんてすな？　矢張地動説をも信用なさらんてすか？」

人々皆微笑する。皆ルーヂンの面を視て、「馬鹿ぢやない、」と思ふ。

ピガーソフが、「貴下は戯言ばかり仰しやる。それは、貴下の仰しやる所は耳新しいかも知らんが、併し問題外だ。」

「ところが、不幸にして私の云ふ所は少しも耳新しい事てない。皆判り切つた事て、耳に胼胝の入る程云故した事てす。それは如何ても可いが、私は甚だ遺憾な事てあると思ふ……」

「何がてす？」とピガーソフがさも憎てらしく云ふ。

一躰議論をすると初は論敵を嘲弄して、それから無禮になつて、

最後に面膨らして默つて了ふのが此男の癖てある。

「立派な人てありながら、排斥するに事を缺いて……」

「主義を排斥する。」

「さ、主義ても宜しい――排斥するのを聽くと私は甚だ遺憾な事に思ふ。何故其樣に主義をお嫌なさる。主義といふものは根本の天則に、生存の原理に基いて立てたものてあるから……」

「さ、それが解らない、其天則が解るもんぢやない……何て判るもんてすか！」

「まア、お待ちなさい。成程、誰にても天則が解るものてはない、それに人間は誰しも思違をすることもある。例へば、ニウトンは天則の幾分を發見したといふ事は貴下もまさか拒みはなさらんて

せう。成程ニウトンは、それは、不世出の人物であらう。けれども、例令不世出の人物でも、其發見した天則は世間一般の重寶になる、然うあればこそ、その發見が益々貴重ものになる。分殊に就いて理一を求めんとするのは人間天賦の傾向であつて、所謂文明といふものも……」

「いや大變な事になつて來た！」とビガーソフが嘲弄かした。「私は俗物だから、そんなえらい高尚な議論は胸に塞へる――大嫌ひです。」

「それは御勝手である。併し貴下が俗の事の外は耳を假すのも、厭だと仰しやる、それが即ち一箇の主義といふものである、理論といふもので……」

「文明！　えらい怖かない事を仰しやる。そんなに文明々々と御大層らしく仰しやるけれど、文明が何の役に立ちます。半文の價値もありはせん。」

「併し、ビガーソフさん、貴下は議論ばかり下手ね」と、ダーリヤが云ふ。内々新客の落着いて、少しも取案さぬのが氣に入つた樣子である。「C'est un homme comme il faut（立派な人だとのこと）」とルーヂンの面を惚々諦視めて、「手馴けてやりませう。」これは露西亞語で思つたのである。

ルーヂンは暫らく默つてゐたが、頓て言葉を續けて、「私は敢て文明を辯護しやうとは思はぬ。辯護せんでもの事である。貴下は、文明は嫌ひだと仰しやる……好不好は有るから、それも致方が

ない、それに餘り枝葉に入るから、それはそれとして措いて、古い諺に「ユビーテル、汝は怒れり、されば汝は過てるなり」といふことがある。私の思ふには、主義や、全體論を排斥するのは可いが、それと一所に知識や、學術や、學術を信ずる心、即ち自分を、自分の力を信ずる心さういふものまでも排斥するから、それて宜しくないと思ふてす。人間には然ういふ信仰が必要である。唯感覺ばかりて活きてゐられるものてない。思想を怖がつて信用しないといふのは間違つた話てす。懷疑主義を懷くと何も出來なくなる、何を仕遂げる氣力もなくなる……」

「そんなことはほんの言葉て、意味も何も有りはしません！」

「それは或は然うかも知れん。併しながら人は往々意味の有る事を云ふ必要が有つても、ほんの言葉だと云ふて、それを避けたがる。」

「エ、何を？」と云つてピカーソフは眼を細める。

「何をと云つて、大抵解つてゐましやう、」と我知らず苛々とした直く氣を取直して、「かうてす、若し人に堅固な信仰がなく、確乎とした立脚地がなかつたら、國家の急務や、國民の本分や、未來や、それが如何して解ります？　如何して自分の盡すべき本分が解ります。若しも……」

「最う止めます！」とピガーソフは慳貪に云つて、辭儀をして、濟して他の方へ往つて了つた。

「やれ〳〵、到頭敗北！」とダーリヤが嘲弄した。「御心配にや及び

ませんよ、ドミートリイ……」と愛想よく莞爾として、「あの、貴下のお讓の名たる名の義は？」

「ニコライチ。」

「ドミートリイ、ニコライチ！　どうせかうだらうと思つてゐました。彼人はね、最う議論が厭になつた風をするので、實は最う議論が出來ないのですよ。それよりか最そつと此方へお進みなさいませんか？　何かお喋舌を致しませう。」

ルーヂンは椅子を居去らせた。

ダーリヤは言葉を繼いで、「今までお知己でなかつたのが殘念なやうですよ……貴下は最う此書を御覽になりましたか？ C'est de Tocqueville, vous savez ?（トクヴイーユ、御存じといふほどのこと

と佛蘭西の小冊子を出す。

ルーヂンは小本を受取つて、二三枚開げて見て、机の上へ返して、此書は未だ讀んだことはないが、併し中に書いてあることは度々考へたことがあると答へた。そこで、話の種は出來た。けれども、初の内はルーヂンも何となく躊躇つて、思ふ所を判然とは云はず、言葉に差支へるともあつたが、其内に氣が乘つて來て、口が解ける。二十分も經つた頃にはルーヂンの聲ばかりするやうになつて、誰も彼も皆其周圍に集つて了つた。

獨りピガーソフのみはその仲間に入らず、隅の方の開爐の側に居る。ルーヂンは熱心に巧に話をしたくだらぬことは少しも言はぬ。博覽で多識であるとは其話でわかる。誰も此人がこれ程

の人物とは思ひ懸けなかつた、つまらぬ服裝をして、名も聞えぬ人であつたから。如何して田舍に此樣な才物が忽然現れ出たことかと、人々不思議の想を爲すばかりである。それだけに又一層眼覺ましく思はれるので、皆心を奪はれて了つた、ダーリヤを首としてルーヂンを世間へ引出す工夫をしてゐる。一寸心に浮ぶ所は、年は取つてゐても、未だ餘程愛度ない所がある。アレクサンドラは、實の所はルーヂンの話が餘り善くは分らなかつたけれども、眼覺しいことに思つて欣々してゐる。弟も同じく驚いてゐる。パンダレーフスキイはダーリヤの樣子に氣を附けて羨ましく思つてゐる。ピガーソフは「五百ルーブルも出したら、もッと好い鶯が

ある！」などゝ思つてゐる……けれども一番感に堪へたのはパシストフとナターリヤで。パシストフは殆ど息氣をせず、始終口を開いて眼を睜いて、生來人の物を言ふのを始て聽いたやうな面をして坐つてゐる。ナターリヤはナターリヤで、面をぽつと赧らめて、凝然とルーヂンの面を諦視めた儘、眼の中を曇らしたり光らしたりしてゐる……

「眼付がどうも好いぢや有りませんか！」とワルインツォーフが囁くと、

「はア、ねえ。」

「唯惜しいことには手が大きくて赤いけれど。」

ナターリヤは是には何とも返答をしなかつた。

茶が出る。人々漸々口を開き出す。けれども、ルーヂンが一度物を云ふと、皆忽ち口を噤むて了ふ。大した感動を與へたものである。ふとダーリヤはビガーソフに調戯ひたくなつたので、其側へ來て小聲で、「何故貴下は默つて苦笑ひばかりしてゐらッしやる？　最う一遍掛つて御覽なさい」と云つて返答をも待たず、ルーヂンを招き寄せて、「貴下は未だ御存じないけれど、此方には」、とビカーソフを指して、「まだ可異な事が有りますよ。女が甚い嫌ひて、何の彼の云つては攻撃なさるです。眼を開けて上げて下さい。」

ルーヂンはビガーソフを下目に視た……が、それも餘義ないことて、首二ッがけも背が高いから。ビガーソフは怫然として只さへ肝癪の強さうな面を眞蒼にする。

少し震へ聲で、「さうぢやありません。女ばかりを攻撃するのてない。總て人間が餘りぞッとせぬてです。」

「何故然う人間をお嫌ひなさる？」とルーヂンが問ねる。

ビガーソフは直とルーヂンの眼の所を睨むて、

「多分自分の心を研究した結果てせう。自分の心を研究して見ると、視れば見るほど穢い。私は自分を尺にして人を測る。それは間違つた事かも知れん、私は人より百倍も善くないのかも知れん、併し如何しやうが有りませう？　習慣てす！」

「了解りました。私も御同感てす。高尚な心のものなら、誰にしても自非の念は起る。併し然ういふ境涯に沈淪して了つて浮ばれんては困りますな。」

「これは辱ない、私の心に高尚といふ折紙を附けて下すつて。併し私の境涯は一向何でもない、これて結構です。だから浮ぶ瀬が有らうが有るまいが、そんなこと頓着はない！　又餘り浮びたくも有りません。」

「けれども、それでは――失禮な申しやうだが――自愛心さへ滿足すれば、眞理に合はんでも可いといふことになる……」

「勿論です！　自愛心――これは私にも解せる、貴下にも解せるでせう、誰にでも解せる、併し眞理は――眞理とは如何なものです？　何處に遺こつてゐます？」

「また議論が後戻りをしますよ」とダーリャが口を挿む。

「後戻をしたつて宜しい。御存じなら承りたい、何處に遺ちてゐ

ます。カントが眞理とはかういふものだと云へば、ヘーゲルは否然うでない、こんなものだと云ふ。」

「ヘーゲルはどんなものと云つたが、御存じですか？」

とルーヂンが何氣なく云ふと、ビガーソフは憤然となつて、

「眞理は何樣なもんだか、私にや解せんと云ふんです。私の考では、眞理といふものは全然ないものだ。成程、語はある、けれども實體はないものだ。」

「まア、けしからん！」とダーリャは大聲を立てた。「能くまア恥かしくもなく其樣な事が言へますね！　眞理がない？　眞理が無いから、生きてる效が有りますか？」

ビガーソフは忌々しさうに「眞理が無くつても、御宅の料理人の

ステバンが居なくなつた程に不自由な事は有りません。ステバンは肉羹を煮させたら名人でさ！　それに眞理が何の役に立ちます？　眞理で頭巾を縫つて被る譯にやいきませんや！」

「戯言は駁論にはなりませんよ。殊に其樣な人を讒謗するやうな言なら、尙更……」

「眞理は如何だか知らないが、忠言なら些とは耳が痛いでせうさ」、と呟くやうに云つてビガーソフは憤然しながら他の方へ往つて了つた。

それからルーヂンが自愛の事を論じ出したが、いふ事に洵に間然がない。自愛の心のない人は取るに足らぬ、自愛心は謂はゞアルヒメードの槓杆で、これさへあれば大地を轉ばすとも出來る。

自愛心は結搆であるが、人たる者は自分の自愛心を御すること騎士が馬を御するが如くならねばならぬ、自分一個の私を公益に殉ずることが出來ねば不可……」

といふ事を說いて、さて云ふには、「私愛は自殺の樣なものです。私愛の人は一本立の實も何も結らん木の如うに枯れて了ひます、自愛は完全を求むる活潑な傾向であつて、總て偉大な事の原因となる……實に自分一個の私は强情なものであるけれども、それを如何がなして挫かなければならん、挫かなければ天眞を發揮することは到底出來ません！」

といふと、ビガーソフはバシストフに向て、鉛筆は有りませんか？

バシストフは何の事だか一寸は解らぬやうであつたが、頓て、

「鉛筆を何になさる？」

「今ルーヂンさんの云はれた最後の一句を書留めて置かうと思ふんです。書留めて置かんと、然うでもない、忘れると不可！　あいふ文句は四三のやうなもので、滅多に出るもんぢやない。」

「戯言にも程が有る！」と鋭く云放つてパシストフは餘所を向く。

其時ルーヂンはナターリヤの側へ來た。ナターリヤは起上つて狼狽する。

側に居たワルインツォーフも同じく起上つた。

旅の公達といふ體裁て、柔しく、愛相よく、ルーヂンが「ピヤノが有りますね。貴嬢がお彈きなさるんですか？」

「はァ、少しは致しますが、パンダレーフスキイさんは誠にお上手

て……」

パンダレーフスキイは面をぬッと突出して莞爾として、

「あんな事を仰しやる！　御自分が御上手でゐらつしやる癖に。」

「シウベルトの„Erlkonig"を御存じですか？」とルーヂンが問くと、

「知つてますとも！」とダーリヤが引取つて、「一つお彈りな、Constantin……貴下は音樂がお好き？」

ルーヂンは唯一寸首を垂げたばかりで、頭を撫でゝ聽に掛る：

……パンダレーフスキイは彈き出した。

ナターリヤはピヤノの側に、恰どルーヂンの眞對ふに座に着く。

ピヤノの音がしだすと、ルーヂンの面は華やかになつた。薄綠の眼が徐に動いて、折々ナターリヤの面に止まる。と彈止む。

ルーヂンは何とも云はずに、開放した窓際へ寄つた。庭は暗霧の羅に包まれて、香氣が紛々と迸つてゐる。近い所の植木は凉しさうに眠つてゐる樣で、星は靜にちら〳〵と見える。此悠々した夏の夜の景色に對ふと、心も自ら緩む。ルーヂンは薄闇い庭を覗いて視て、つと此方を振向いて、

「音樂を聽いて、此夜景色を觀ると、獨逸に遊學してゐた頃の事を憶出しますな。集會や、セレナーダ夜の音樂や……」

「獨逸へ入らしつたことが有るんですか？」とダーリヤが問く。

「ゲイデリベルグに一年居ました、それから伯林にも一年計り。」

「矢張大學生の風をして居らしつたんですか？　彼地ぢや大學生は皆異樣な風をしてゐるといふぢや有りませんか？」

「ゲイデリベルグに居た頃は私も馬刺輪の附いた長靴を穿いて紐附のウェンゲルが衣上を着て、頭髮を肩まで垂げてゐましたが、伯林では大學生も尋常の人に違はん風をしてゐます。」

アレクサンドラが「貴下の遊學して居らしつた頃の御話を些と伺ひたいもんですね。」

ルーヂンは話出したが、餘り面白く行かなかつた。どうも云ふ事に修飾が無い。餘り眞面目すぎる。けれども、其留學の話は匆匆に止めて、文明だの學術だの、大學だの、大學の生活だのを題目にして、總べての議論に移つたが、かうなるとざつと大掴みの事を云ても、大きな景が浮ぶので皆耳を澄して聽いてゐた。洵に言廻しが巧くて、乘地になつて訓してゐる其言草に少し判然しない所は有

つたが判然しないだけに尙更面白い。

種々の事がむら〳〵と込上げて來るので、それを口へ出して言て見ると、どうも判然しなくなる。曖昧になる。象が象を追つて浮び、比喩が比喩に續いて起る、それにも奇想天外より落ちたのも有れば、又著々と肯綮に中つたのもある。口を突いて出る言葉は神來の語で、話上手が自慢の言葉使とは撰が異ふ。別に言葉を求めむとても、言葉が思ふ通りに自在に口へ出て來る、而も直に肺腑中から流れ出たやうで、確信の熱を帶びてゐる。音調を上手に整へるのは神秘中の神秘とすれば、ルーヂンは此無上の神秘を手に入れてゐるのである。心の絃を一つ彈けば、他の絃までが幽に鳴つて餘音を響かせる、その術を心得てゐるのである。其話を聽いて

ゐて何の事とも善くは領會めぬ者もあらうが、然うした者でも兎に角胸が張つて、何やら幕がばつたり落ちて、何か前方に燦爛とした物が見えるやうな心持がする。

ルーヂンの心は總て未來に向つて働く、それ故に何となく勢が善くて若々としてゐる。窓際に立つたまゝ、誰の顏を見るでもなくて話してゐたが、人々が自分と心を一つにして身に染みて聽いてゐるに、若い婦人が傍には居るし、夜景色は美しいので、話も自ら調子附いて、我感念の夫から夫と變つて行くに連れて雄辯になり、詩的になる……音聲までが落着いたしんみりした調子で一入興味を增すので、何か思ひも寄らぬ神々しきものが當人に乘移つて物を云はせてゐるやうである……ルーヂンは人の露の命が

如何して不滅のものになるか、其理由を說いてゐたのである。

さて話の終に、「スカンヂナウイヤにかういふ昔話があります。さる王樣が家來の武士と一所に薄暗い奧深い小舍の中で火に當つてゐたことがある。冬の夜の事であつたので。すると小禽が不圖入つて來てつッと通脫けて往つた。それを見て王樣の云ふには、人の身も猶ほ此小禽の如し、暗黑を出て暗黑へ行く、暖い明るい所に居るのは束の間であると云ふと、家來の中でも一番年嵩の者が、小禽は暗黑の中に消えて失なりは致しません、矢張自分の巢を探出すことで御座ります」と云つたといふ……成程、人の一生は短い果敢ないものですが、併し人を經て總ての大業が成就する。其神力の器となつてゐると思へば人間の歡樂などを顧みるに足

らん。死の中にも生は有つて自分の巢は見出せます……」

と口を噤むてみると、我にもなく極りが惡くなつて、微笑して差俯向く。

「Vous êtes un poète 貴下は、詩人だ」、とダーリヤが聲を低めて云ふ。

一座の人々も皆然う思つた——尤もビガーソフだけは例外で。

ビガーソフはルーヂンの長談の終るを待たずして、竊と帽子を取つて、戶口の處に立つてゐたパンダレーフスキイに「どうも馬鹿の仲間の方が宜いやうです」と憎さげに囁きながら出て行つたが、誰も出て行くのを氣に留めた者もなければ、また抑留る者も無かつた。

晩餐を運び込むてから、半時も經つと、皆おもひ〳〵に歸つて了

つたが、ルーヂンだけは引留められて泊ることになつた。アレクサンドラは弟と一つ馬車で歸りながら幾度かルーヂンの奇才に驚嘆した。ワルインツオーフも姉に尤も同じだけれど、併しルーヂンの所説は折々少し胡亂になる……ソノ判然しないと、多分思ふ所を明に云はうと思つたのであらう、言葉を足して云つた。けれども顔色も冴えんで、馬車の隅を凝視めて、さも憂はしさうな眼付をしてゐた。

パンダレーフスキイは寝やうとして絹絲で繡をしたヅボン釣を外しながら、口へ出して「中々味を遣るわい！」と云つたが、偶然恐ろしい面をして室僕を睨付けて、彼方へ行けと言つた。バシストフは終夜眠らず衣服をも脱がず、一心にマスクワの友人に贈る手

紙を書いてゐた。ナターリヤは衣服を脱いで臥床には就いたが、同じくまんじりともせず、又眠やうともしなかつた。手で頭を支へて、暗黑を凝然と諦視てゐたが脈は烈しく搏つて、幾度となく深い溜息が胸を突いて出た。

（四）

翌朝ルーヂンが臥床を出ると間もなく、ダーリヤが茶を喫みに書齋に來いと喚びに遣したから、往つて見ると、主婦一人である。大層莞爾やかに挨拶をして、昨夜は寢心は惡くはなかつたかと問ね、自身に茶を注いで呉れて、砂糖は是て可いかと、其樣な事をまて問き、卷烟草を進めて、また二度繰返して、如何して貴下の樣な方と是までお相識にならずに居たらうと異しむだ。ルーヂンは少し離れて座に就かうとしたが、ダーリヤは自分の就てゐる膝懸椅子の側の小さなバテーを指して、それに掛けさせて、少しルーヂンの方へ身を捩つて家族は何人で、何を爲る積だの、如何して爲る積だ

のと問き出した。氣無しに物を云つて、さして心にも留めず聽いてゐるやうではあるが、實はルーヂンに氣を持つて媚びぬばかりにしてゐるのは善く判る。朝から呼びに遣したのも、Madame Reamier風に淡泊した見奇麗な風をしてゐるのも、成程其等である！併しダーリヤも間もなく問くのは止めて、今度は自分の事を、自分の若い頃の事や、知己の事を話し出した。ルーヂンは身を入れて其お饒舌を聽いてゐたが、可異な事には、誰の話てあつても、話の表面に立つものは矢張ダーリヤて、ダーリヤ一人で、話の當の人は影になつて立消をして了ふ。其代りダーリヤが某の顯官に如何いふ事を云つたとか、くれがしの詩人を何程手に入れてゐたとかいふとは委しく判つた。當人の話で見ると、此五十年來の高名の人

は皆如何かなしてダーリヤに會ひたい、ダーリヤの機嫌を取りたいと、只それぱかりを思つてゐたらしく思はれる。其樣な人の事を宛て同輩か何ぞのやうに、別段賞讃しもせず何の氣もなく噂をする。或人の事なぞは奇人だと云つた。譬へて云へば、寶石に立派な緣を附けたやうなもので、さういふ人の名がダーリヤ、ミハイロウナといふ立者の名の緣となつて煌々と光る……

ルーヂンは卷煙草を薫らして默つて聽てゐながら、折々語少なにお饒舌の相槌を打つてゐる。此人は話上手でもあれば、また話好きでもある、話の音頭を取るのは得手でない代り、聽上手で、初手から紛らかされない者なら、誰でも此人の前では氣を緩して口を解く。それ程身を入れ他の話に筋を追つて話を誘ふやうにする

のである。他より立優つてゐると思ふのが常の習となつた人は一種の好意を持つてゐるものであるが、此人にもそれが有るのである。他と論爭ふとなると、なか〳〵論敵に口を開かせない、熱心な鋭い辯舌で壓倒して了ふ。

ダーリヤは露西亞語で物を云つてゐた。國語に通じてゐるのを自慢してゐるのであるが、佛蘭西風の言廻しやら佛蘭西語やらが小五月蠅交る。故意と俗に言廻してゐたが、折々適用が違ふ。ルーヂンはダーリヤの怪しい斑らな言葉遣を聽いてゐても別段何とも思はぬ樣子であつた。恐らく耳がないのかも知れぬ。

ダーリヤは到頭喋り草臥れて、椅子の背の方の枕に頭を持たせて、ルーヂンの面へ眼を遣つて口を噤むで了つた。

ルーヂンは落着いた聲で、成程それて解りました、何故毎年夏になると田舍へ入らッしやるのか。休息なさらなければならんのですな。都て紛擾した揚句に田舍の閑靜な處へお出てなさると、爽然して氣が確りなさるのてせう。貴女は景色がお好きてせうな？」

ダーリヤは流盼にルーヂンの面を視て、「景色ですか？……景色……それは然うてすとも……大變好きです。ですが、田舍だつて談敵がなくッちや困りますが、此邊には一人もないてすよ。ピガーソフが一番分曉つてゐる位て。」

「昨夜の憤りッぽい老人てすか？」

「はア、彼人です。あれても田舍ては無いには增しですよ——

時々笑はせ位はしますからね。」

「彼人は馬鹿ぢや有りません。唯邪路に入つたのです。貴女は如何いふお考かは知らんが、非難すといふことは——何も彼も盡く非難して了ふのは——宜しくないですな。總てのものを非難すと、直に人物だと謂はれる。善く有る手てさ。非難す者は非難されるものよりえらいと好人物が直き斷定する。けれども、それが當にならんてすな。何にだつて探せば缺點は出て來ます。それに道理な事を云ふにしても、非難すのは宜しくない。始終非難しつけてゐると、活氣が失なつて槁木死灰のやうになる。高慢の鼻を高くするは宜しいが、それが爲に觀察といふことの眞の妙味を解し得なくなる。苛立つた心て餘り小さな處ばかりに目を注

けてゐると人生が――人生の眞相が――分らなくなる。から、見るものに吠え付いて、人笑はせとなつて、それて結局となる。何でも愛する者でなければ、非難すとも罵るとも出來んもんですな。」

「Voila m-r pigassoff enterré! ヴォイラー ピガーソフ アンテレー くやられたといふほどのこと 貴下は眞個に人物の批評がお上手だ！併しピガーソフには貴下の仰しやる事は解りますまいよ。彼人は自分ばかりを愛してゐるのですからね。」

「それてゐて自分を罵るのは、自分を罵らなければ人を罵るのに都合が悪いからてせうな。」

ダーリャは笑ひ出した。

「玉石……アノ何てすね……玉石同じく焚くといふ所てせうね。それから、男爵は貴下は何と思し召す」

男爵ですか？善い人ですな、親切て、博識て……唯締りがない……一生學者とも附かず、俗人とも附かず曖昧て終ふてせう、即ち學問好きて――露骨に云つて了へば、何てもない人て……惜しいものですな！

「私も然う思ひますよ。論文も見ましたがね……Entre nous… cela a assez peu de fond. 是れぎりのお話てすが……どうも論據がしつかりしませんのれといふほどのこと」

暫くしてルーヂンが「それからまだ如何な人が居ます？」

ダーリャは小指て卷烟草の灰を落して、他には最う誰も有りません。リービナ、アレクサンドラ、バーウロウナ昨夜お遭ひなすつた――彼女は姿色は善が、唯それだけの事て、弟も矢張好人てす、Un parfait honnête homme. ユン パルフェー オーントーテー オム 洵に温厚な人てす それから、ガリン侯は御存じだと。それ

だけです。まだ二三人近所に居ますが、是はお話にもならん人達で。恐ろしい野心が有つて氣取るんでなければ、含羞むでなければ無暗に無遠慮か何かで。夫人たちとは、御存じの通り、交際をしませんから。ほ、まだ一人居ましたつけ。大層立派な教育のある人ださうで、學者だ何ぞと評判をしますが、怖ろしい奇人でね、空想家ですよ。Alexandrine. は知己で、何だか少し氣でもあるやうですが……ほんに、貴下、些と彼女を薫陶してお遣んなさいましな。可愛らしい女ぢや有りませんか？　唯最う少し大人びなければ不可ない、何でも最う少し大人びなければ。」

「大層人好のする方ですな。」

「全くの小供で、彼女が本當の赤兒です。それでも一度嫁いたことが有るのですが、Mais c'est. Tout comme. 嫁いたつて何の事もない。のです、とでも譯すべきか若し私が男だつたら、彼樣なのにてなければ、惚れませんね。」

「然うですかな。」

「然うですとも。あゝいふのは兎に角無垢です。無垢な眞似は出來ませんからね。」

「他の者の眞似なら出來るんですか？」と云つて、ルーヂンは高く笑つた。此男の高笑することは滅多にない。其代り、高笑をすると、顏が妙な鹽梅に老人じみて、眼がすぼまつて、鼻に皺が寄る……

「リーピナさんが氣があるといふソノ奇人は如何いふ人です？」

「たしかレジチフ、ミハイロ、ミハイルイチといひましたつけ。矢

張地主です。」

ルーヂンは吃驚して顔を揚げて、「レジテフ、ミハイロ、ミハイルイチ？　彼男が御近所に居ますか？」

「はア。御存じですの？」

ルーヂンは默つてゐたが頓て、「以前懇意でした……餘程以前の事ですが。たしか、金滿家でせう？」

と肱懸椅子の飾房を拈る。

「はア金滿家ですよ。ですがね、ひどい服裝をして輕馬車に乘つて、手代か何ぞの樣な風をして歩いてゐるですよ。分別つた人だといふから、如何ぞして宅へも出入りをさせたいと思つてゐますがね、それに少し掛合をしなければならん事もありますから……

……私はこれでも自分で地面の差配をしてゐるですよ。」

ルーヂンは頷いて見せた。

「自分でやるですよ。お國風を守つてね、馬鹿な外國の眞似なんぞはしませんが、それでも如何か斯うかズーッとね（と撫でるやうな手附をして）差支なくやれますよ。」

ルーヂンは慇懃に、「婦人には事務の才がないなどゝ主張する人もありますが、私は其樣な筈はないと始終思つてゐるです。」

ダーリヤは快然に莞爾して、お世辭にしろ嬉しい！　だが、何を云はうと思つたんだッけ？　えゝと、何のお話でしたッけね？

あゝ、然う〳〵、レジテフのお話でしたッけね、地割の事で少し掛合はなければならん事があるので、度々來て呉れろと云つてるんで

すがね、今日も心待に待つてゐるんですが、來ないかも知れません
よ……さういふ奇人ですの！」

靜と戸が開いて下男頭が入つて來た、これは白髮で禿頭の背の
高い男で、黑の上衣に白の胴着を被て同じく白の胸飾をしてゐる。

「何だえ？」とダーリヤは云つたが、一寸ルーヂンの方を向いて、小
聲に、C'est ce pas, comme il ressemblea cannang？ぢやありませんか」

下男頭は、「レジチフ樣が入らッしやいましたが、お通し申しても
宜しう御座りまするか？」

「あら、まア！　噂をすれば影とやらだよ、お通し申してお呉れ。」

下男頭は座舗を出て行く。

「あんな奇人でも到頭來ましたよ。けれども、折が惡いのね、お話

の腰を折つて了つて。」

ルーヂンが起上つたので、

「何處へ、貴下？　居らしつても關ひませんよ。ビガーソフを批
評なすつたやうに、一つレジチフをも批評して下さい。貴下が仰
しやると、Vous gravez comme avec un burin. とでも譯して置くべし　居らッし
やいな。」

ルーヂンは何か云はうとしたが、考へて又座に就いた。

諸君お知己のレジチフが座舗へ入つて來た。矢張灰色の外套
を被て、日に燬けた手に例の帽子を持つてゐる。靜に主婦に會釋
をして喫茶卓の側へ寄る。

「到頭入しつて下すつたね！　何卒お掛けなすつて。貴下方は

お知己ださうですね、」とルーヂンを顧みながら云ふ。

レジヂフはルーヂンの面を視て變に莞爾として、

「知つてゐます。」

と一寸辭儀をする。

「大學に一所に居つたので」、とルーヂンも小聲に云つて、差俯向く。

「大學を出てからも逢ひましたな？」、とレジヂフは冷淡に云ふ。

ダーリヤは怪訝な顏をして兩人の樣子を視てゐたが、更にレジヂフに座を勸める。そこで、レジヂフも座に就いて、

「御用といふのは地割の事でせうな？」

「地割の事も地割の事ですが、兎に角一度お目に懸りたくて。ツイ御近所だのに、それに貴下の御家とは親類でないばかりの間柄

てすから。」

「さうですか、それはどうも……て、地割の事は貴宅の執事と話を決めて了ひました。執事の云ふ所に悉く同意て。」

「どうか左樣ださうで。」

「唯貴女にお目に懸つた上てなければ證書に署名は出來ぬといふことて。」

「はア、さういふ規則にしてゐるのですが、アノ何ですか、貴下の所のは皆年貢を納めてゐるのですか？」

「然うです。」

「それてゐて貴下御自身に地割の世話をなさるんですね？　まア、御奇特な！」

レジチフは默つてゐたが、頓て、

「では最うお目に懸りましたから……」

ダーリヤは苦笑をして、

「左樣さね、お目に懸つたには違ありませんね。どうも酷く餘所餘所しく仰しやいますね。屹度私共へお出でなさるのがお厭でしたらうね？」

「私は何處へも出懸けません」と濟ましてゐる。

「何處へも？　アレクサンドラの所へ入らッしやいませんか？」

「ワルインツオーフとは以前から懇意ですから。」

「ワルインツオーフと！へ、へ、併しお厭なものを無理に何しは致しませんがね……失禮な申樣ですが、私は、貴下より年上だから

口幅つたい事を申しますよ。一躰まア何で貴下は然う拗ねて居らッしやるです？　私の家が一躰お氣に入らないんですか？それとも私がお嫌ひなんですか？」

「私は貴女とはお親しくせんから、嫌ひも好きも有りません。お宅は結構です。けれども、腹藏のない所を云へば、私は窮屈が嫌ひです。着られるやうな上衣もなければ、手袋も持つてゐません。それに私は貴女輩とは全て境涯が違ふから……」

「何故でせう？　身分にしても、教育にしても、御同樣ぢや有りませんか？　Vous êtes des nôtres. ヴー　セト　デ　ノートル　貴下も吾々組でさアれ」

「身分や教育は姑く措いて、一躰どうも……」

「人間は人間に交らなきや不可ませんね。ヂオゲンが桶に入つ

たやうに唯一人て居たら何處が面白いてせう」

「桶に入つてゐるのが適宜なんです。それに私は人間に交らんと仰しやるが果して交らんてせうか？」

ダーリヤは唇を咬締めた。

「それは別のお話になるが、私は唯貴下の御交遊の仲間に入れないのが殘念だと申すので。」

ルーヂンが嘴を容れて「自由を愛するといふのは至極結構な事ですが、レジチフさんはそれを誇張して仰しやるんてせう。」

レジチフは何とも云はなかつた、唯ルーヂンをジロリと視たばかりて。一寸座に穴が開く。

レジチフは突と起上つて「ては、地割のお話は決ッたから、お宅の

執事に證書を贈すやうに云つても宜しいてせうな？」

「宜しう御座いますとも……尤も貴下は餘りお酷いから、お辭り申す筈ですが……」

「ですが、此度の地割は私の都合よりは貴女の御都合の善いやうに決めたのて。」

ダーリヤは首を竦めた。

「私共ては朝飯も食りたくないのてすか？」

「難有う私は朝飯は食ひません、それに少々急ぎますから。」

ダーリヤも起上つて、

「ではお引留め申しません」、と云ひながら窓際へ寄つて「お引留め申すも失禮てすから。

レジチフは辭儀をする。

「どうも失禮致しました！　御事多の所をお呼立て申しまして。」

「如何しまして、と云つて、レジチフは出て行つた。

ダーリヤはルーヂンに對つて、「如何です、まア!?　兼て奇人だと

は聞いてゐましたが、正可斯樣なぢやあるまいと思つたら。」

「矢張ピガーソフと同病ですな。一風變つてゐたいといふ病で。

ピガーソフはメフイストーフエリを氣取つてゐるが、彼男は、大儒

を氣取つてゐるので。どうも斯ういふ病には利己主義や己惚氣

は澤山に有つても、眞理や愛の分子は少ない。これも矢張一種の

政略ですからな。平氣な氣の無い面を蒙つてゐると、惜しいもの

だ、あれ程の才を持腐れにして了つて、と思ふ者が有るかも知れん。

けれども、熟く視ると、實は才も何も無いので。」

「Ei, da deus！」二人めどうも、まア、お眼が高い！　如何なに隱さうと

したつて、貴下に遭つちや敵はない。」

「でも有りますまいが……併し、實はレジチフの事を彼此云つ

ては濟まないので、私は親友として彼男を愛したことが有るから

……尤も其後種々行違が有つて……」

「仲違をなすつたんですか？」

「いや然ういふ譯でも無いですが、疎々しくなつて了つたです。

最う到底も舊のやうにはなりますまい。」

「大方其樣な事だらうと思ひました、彼人の居る中ぢゆう貴下は

何となくお呀えなさらなかつたから……併し、どうも難有うご

ざいました。お蔭で大層今朝は面白う御座いました。最う好い加減にして置きませう。朝飯の時又お眼に懸ります。私は是からまだ種々用が有りますから。書記が――貴下は御存じの筈です。Constantin, c'est lui pui est mon sécrétaire（コンスタンチン、セリュイ、キイ、エ、モン、セクレテール、コンスタンチンれあ れが私の書記です）――最う屹度待つてゐるでせう。彼男は若いですが、善く氣の附く質で、上出來の男です。大層貴下に敬服してゐますよ。では、御免を蒙ります。眞個に男爵は貴下のやうな方を紹介して下すつて嬉しい！」

とダーリヤはルーヂンに手を出す。ルーヂンは先づ其手を握つて、それから其に接吻して、座舗を通つて戸外へ出ると、ナターリヤに出會つた。

《五》

ダーリヤ、ミハイロウナの一人娘ナターリヤアレクセーエウナといふのは一寸見は餘り人好のせぬ風である。色は淺黑く、瘦ぎすで、少し猫背で、未だ身體も全然は發育てゐないけれど、顏の道具は完備つてゐて美しい、尤も十七の小娘にしては少し長て見えるけれど。此娘の命は綺麗な滑こい額で、眉は細くへの字形をしてゐる。餘り口數をきかず、意を籠めて一心に視たり聞いたりするところは何に向つてもその物の意を了解ふとするやうな鹽梅である。往々兩手を垂れて凝然と身動もせず考へてゐることがあるが、其時の面には內心で種々に物を思つてゐる影が映る……覺

束ない微笑がふと口元に浮んで消えると、黒眼勝の大きな眼が空を向上る……Qu'avez vous? どうなすつた と M-lle Boncourt が訊ねて、さて處女が屈托したり放心したりしてゐては見ともないと云つて叱る。けれども、ナターリヤは放心してゐるのではない、どころか物學びに身を入れて、書物に對つても、針を持つても、ついぞ厭な顏をしたことがない。深く強く物事に感ずるけれども、内々に感ずる。子供の時にも餘り泣かなかつたが、今でも溜息をすることさへ罕で、何か心に逆ふ事の有る時には唯少し蒼ざめるばかりである。母はナターリヤを穩當で分別があると思つて、戯に Mon bonne-être homme de fille わが尊敬すべき娘の義 と謂つてゐるけれど、左程才氣があるとは思つてゐない。「ナターシャ ナターリヤをやさしく和げていひたるなり は幸福と淡泊して

ゐる。私に似ないで好い鹽梅だ。屹度苦勞を知らずに了はう。」と常々云つてゐるが、間違つてゐる。けれども、母親で娘の氣質を知つてゐるものは澤山無いものである。

ナターリヤは母親を愛してはゐるが、餘り尊信してはゐない。

或時ダーリヤが娘に對つて「お前は何事でも私に隱すには當らないよ。何だかお前は隱立てもしさうだけれどもね……自分の了簡を持つてお居てだから……」

と、ナターリヤは母の面を視て、心の中で「自分の了簡を持つてゐるのが何の不思議だらう?」

ルーヂンが戸外で出遭つた時には、ナターリヤは庭園へ往かうといふので、帽子を取りに部屋へ入る所であつた。朝稽古は最う

終むだのである。ナターリヤも最う小娘待遇をされてゐない、M-lle Boncourtに神怪學や地理學を敎へて貰はなくなつたのも久しい前からの事であるが、其代り毎朝その眼の前で歷史旅日記などといふ利益になる書物を讀むことになつてゐる、ダーリヤは宛も自分には自分の流儀が有つて、それを守つてゐるやうな面色をして一々その讀本を擇む。けれども、實はペテルブルグの書肆の佛人が送つて寄すのをそつくり其儘ナターリヤに取次ぐだけの事である。尤もデュマー、フィース會社で出版する小說は格別で、これはダーリヤ自身に讀む。M-lle Boncourtはナターリヤが歷史を讀むとなると、いつも別して澁面を作つて氣難かしい面をして眼鏡越にじろ〳〵見る。一躰歷史といふものは怪しからぬ事ば

かり書いてあると思つてゐるからであるが、其癖此老婆は昔の豪傑では何故かカンビス一人しか知らない、近世の人ではルイ十四世とナポレオンとを知つてゐるばかりであるが、ナポレオンは大嫌ひである。けれども、ナターリヤはM-lle Boncourt夢にも知らない書物をも讀む、ブーシキン物なら何でも暗で知つてゐる……

ナターリヤはルーヂンを見ると少し面を赧らめた。

「散歩ですか？」とルーヂンが云ふ。

「はア。庭園へ。」

「私もお伴しませうか？」

ナターリヤはトM-lle Boncourtの面を視る。

Mais certainement, monsieur, avec plaisir, た御一所に　と老婆が急込むだ

やうに云ふ。

ルーヂンは帽子を把つて一所に出懸た。

ナターリヤも初の内は一つ道をルーヂンと並んで行くのを極り悪く思つたが、それも其内に少し改る。ルーヂンが何を爲てゐるの、田舍は氣に入つたかのと問き出したので、遠慮勝にそれに返答をしてゐたが、狼狽した含羞むだやうな風をすると、人は直に厭らしい氣でもなるやうに言ひ做し思ひなしてツイそれにして了ふけれど、ナターリヤには其樣な樣子はなかつた。たゞ併しどうも胸がどきつくらしい。

ルーヂンはナターリヤを流盼に視て、田舍は淋しくは有りませんか！」

「些とも淋しいとは思ひません。反て來て善かつたと思ひます程で。何だか田舍は面白うございますから。」

「面白い……えらい言を仰しやるね、併しそれも其筈ですかな、未だお若いンだから。

未だお若いンだから、と云つた其調子は羨むのでもなく憐むのでもなく、何だか變な鹽梅であつた。

「若い内が花です！」と言葉を繼いで、學問の目的と云つても、若い時なら造作もなくツイ合點が行くことを有意識に會得しやうとするに過ぎん事ですからな。」

ナターリヤはルーヂンの面を視た、何を云つてゐるのか解らない。

ルーヂンはまだ「今朝久らく御母堂とお談をしましたが、えらい方ですな。詩人達が交際して頂くのを名譽の樣に思つたのも無理はないです。」暫く默然としてゐて、「貴嬢韻文はお好きですか？」

「人を試驗してゐるのだよ」、と肚の裏では思つたが、口へ出しては、

「はア、洵に好きで。」

「詩といふものは神の語ですな。私も韻文は好だが、韻文にばかり詩があるとは限らんもので、詩は天地間に充塞つてゐます、吾々の周圍は皆詩です。此樣な樹を觀ても、天を觀ても、到る處に美と生命がある。美と生命の在る所は即ち詩の在る所ですからな。」

「此腰掛て休まうぢや有りませんか？　も、かう腰を掛けて……

……若し貴嬢とお馴染になつたら（と莞爾々々としてナターリヤ

の面を覗込むて）、屹度親友になるだらうと、何故だか私には思はれるが、貴嬢は如何思ひます？」

「宛て子供取扱ひにする」、と肚では思つたが、何と返答をして可いか解らんので、永く田舍に逗留してゐる積りかと問くと、

「夏一杯、秋へ掛けて、冬も居るかも知れませんが。私は御存じの通り餘り都合の善い方でない。それに家事は無茶苦茶になつてゐるし、最う彷徨いて歩くのも飽々しましたから、好加減に退隱したいと思つてゐます。」

ナターリヤは稀有な事に思つた。

「本當に然う思召して？」と怯々問く。

ルーヂンは佶と此方を振向いて

「と仰しやるのは？」

ナターリヤは少し狼狽しながら、「他の者ならアノ……何てすけれども、貴下は……アノ……働かなければ不可ませんわ、他の利益に成るやうに爲さらなければ。貴下のやうな方が働かなければ働くものはないから。」

「どうも然う仰しやると面目を施します。成程、人の利益になるか……口で云へば何でもないのですな！（と面を撫廻して）人の利益になる！　けれども、假令自ら信ずることが厚いとしても、人の利益になりやうがないから困るです自ら恃む所があつても、眞實に同情して呉れる者がないから困るです……

と、さも心細さうに悄然と差俯向く。昨日きほひ立て彼樣に末

に望を繫けて物を云てゐた是が其人かと異しまれる程てある。

ルーヂンはふと獅子の頭の樣な頭髪を一振揮つて、「いや、然うでない。愚痴だつた、貴孃の仰しやる通だ。どうも有難うございました、實にどうも。（何て禮を云ふのか、ナターリヤには些とも解らなかつた。）貴孃に云はれて私の本分に心附いた、私の履むべき道が解りました……然うです、私は働かなければならんです。若し私に才が有るなら、それを晦ますやうな事をしてはならんです。唯饒舌つてばかりゐて、降らぬ他愛のない言ばかり云ふてゐて、半生の心血を空言に濺いて了つてはならんです。

と滔々と辯ずる。薄志弱行は士の愧づる所、何でも一廉の事功を建てねばならぬといふことを眞心を籠めて言葉巧に聽けば成程

と思へるやうに論ずる。我と我を散々に叱りちらして、およそ行よりは言が先に立つのは熟えた果實を針で突くやうなもので害になる、唯汁氣を漏すのみ氣の張を弛めるのみの事で何の益にも立たぬ。健氣な心を持てば、同情を運ぶ者なきを憂へず、世に知られずに了ふのは我求むる所を我も善くは知らぬほどの人、でなければ、知られるだけの價値が無い人に限ると論ずる。久らく辯じた擧句に、また改めて禮を述べて、ふと思掛なくナターリヤの手を緊く握締めて、「貴嬢はどうも健氣だ、優らしい！」と云ふ。

M-lle Boncourt は露西亞に來てから四十年にもなるが、言葉が善く解らぬから、唯ルーヂンの口から淀みなく言葉が流れ出るのを聽いて眼覺しく思つてゐるのみの事であつたが、この無遠慮な擧

動を見た時には目を圓くした。尤も、此老婆の眼からはルーヂンは音樂師か繪師か何ぞのやうに見えるが、然ういふ人達に禮儀を守れと云つた所で無駄なことだと思つてはゐるが。

老婆は起上つて手荒く身繕をして、最う家へ歸らなければなりませんと、殊にMonsieur Volinsoff（ワルインツォーフの事をかう謂つてゐるので）が朝飯に來るかも知れぬからと、ナターリヤに云ふその口の下から、「それ、彼處へお出でなすつた！」と言足をして住宅へ行くある並木道の方を視遣る。

成程、ワルインツォーフの姿がツイ其處に見える。

ワルインツォーフは逡巡しながら來て、遠方から皆の者に會釋をしたが、厭な面をしてナターリヤに對つて、

「散歩ですか？」

「はア。今歸る所なの。」

「然うですか。ぢや御一所に歸りませう。」

て皆連立つて行く。

「お姉樣はお變りもございませんか？」

とをかしく莞爾やかにルーヂンが云つたが、ワルインツォーフに對ふと、昨日から斯うである。

「難有。變つたことも有りません。今日事に寄ると來るかも知れません……今何かお話中てしたな？」

「然うです、ナターリヤさんとお話してゐたてす、ナターリヤさんの仰しやつた事が酷く胸に中つたものですからな……」

ワルインツォーフは如何な言がとも問かなかつた。人々沈默つた儘、て住宅へ引返した。

* * * * * *

食事前に又サロン會集があつた。尤もビガーソフは來ず、ルーヂンは何か氣の乘らぬ樣子で、バンダレーフスキイを捉へて、ベトホーウェンの曲を奏らせてばかりゐる。ワルインツォーフは默然として俯向いてゐる。ナターリヤは母の側を離れず、ぢッと考へ込むでは又仕事に懸る。バシストフはルーヂンの面から眼を放さず、今に何か名言を吐くだらうと、そればかりを待つてゐる。といふ有樣で三時間ばかりといふもの極く詰らなく過ぎた。アレキサンドラは食事になつても姿を見せなかつたが、ワルインツォー

フは卓を離れるや否や馬車を支度させて、誰にも挨拶をせず、何時の間にかこつそり歸つて了つた。

さてワルィンッォーフどうも厭な心持がする。かねてよりナターリャを想ひに想つてゐて、今日云出さうか明日はいひ出さうかとむづ〳〵してゐるのであるやうではあるが、さかし戀ふの慕ふのといふのではない。それはワルィンッォーフも善く知つてゐる。また嫌はなければそれて可いとしてゐるが、唯最と全然馴染むてからと、その機會を見合せてゐるのである。それならば、何が心配になるのか？　此二日の間にナターリャの樣子でも違つたのか？　待遇かたに些とも變は見えないが……」

今迄は全く見損なつてゐたので、敵は思つたよりも氣が無いと、ふッと思はれて來たのか、それとも妬心が頭を擡げて來たのか、それとも何か厭な事でも有りさうな心持がするのか、兎に角如何紛れやうとして見ても、どうも厭な心持がする。

姉の居間へ通つて見ると、レジネフが來てゐる。

「大層早かつたのね。如何かすつたの？」と姉が云ふ。

「なアに、如何もしたのではないが、たゞ面白くなかつたのです。」

「ルーヂンさんも居て？」

「居ました。

ワルィンッォーフは帽子を放り出して腰を掛けた。

「あのね、セルゲイ（ワルィンッォーフの名）さん、お前さん加勢して頂戴。私がね、

ルーヂンさんは餘程才子で辯が巧いと云つても、此人が强情張つて如何しても承知しないの。」

ワルインツォーフは何故か默つてゐる。

「いや、私は貴女に些とも反對はしない。ルーヂンの才子で雄辯なことは異議はないが、唯彼男は私は嫌ひだといふばかりです。

「君は最う會つたのかい？」とワルインツォーフが云ふ。

「今朝會つた、ダーリヤさんの家で。彼男も今は羽振が好いやうだね。何時か一度はお拂箱になるのだらうが。なにバンダレーフスキーばかりさ、彼女の一生厭きないのは。けれども、今はルーヂンが蹴扈してゐる。會つたね！　加之ルーヂンが端坐として座つてゐるところへ僕を引張出して見せたんだ、ちよいと御覽なさい、此地ではかういふ變人が出來ます、と云つたやうな鹽梅さ。

賣物に出た馬ぢやあるまいし、相を見られるのは迷惑だから、其儘歸つて了つた。」

「何だつて彼家へ往つたんだい？」

「地割の事で、といふのは表面で、實は僕の面相を視に呼んだのだらうさ。どうせ貴婦人の事だからね！」

「あ、解つた〳〵、彼方が、えらい、もんだから、それで貴下はやつかむんだよ——吃度然うなんだよ、」とアレクサンドラが憤だした。「それで仇敵のやうに思つてゐらつしやるんだよ。でも私共は彼方は智慧が有るばかりでなく吃度情も厚いだらうと思ひますね。だつて眼付で判りまさ。アね、アノ何のお話を爲さると……」

「正直の德を說くと……」

「憎らしいねえ、貴下は。泣出しますよ。本當に可惜事をした、貴下なんぞには關はずにダーリヤさんの家へ行けば可かつた。貴下なんぞに關つてゐるほど詰らないことはない。もう何卒後生だから調戯ふのは止して頂戴(と哀れな聲を出して)、その暇で些と彼方の若い時の話でもして聞かして頂戴ッてば。」

「ルーヂンの若い時の話ですか？」

「はア。貴下は舊いお知己で善く御存じだと仰しやるぢや有りませんか？」

レジネフは起上つて座舗を歩き出した。

「さア、善く知つてゐることは知つてゐる。彼男の若い時の話を

しろと仰しやるんですな？　よろしい。やりませう、一躰ルーヂンは某地の者で貧乏地主の息子です。親父には早く訣れて母親の手一つで育てられたのだが、此又母親といふのが極の結構人で、息子に掛けては眼がないといふ人で、自分は燕麥の粉ばかり食つてゐても、息子の爲には在金を皆費つて了つた。教育はマスクワで受けたのです。初は叔父とかゞ學資を出してゐたのだが、成人してからは金滿の侯爵を欺して……ぢやなかつた、ツイ口が滑つたんです……侯爵に愛せられて、其人に金を出して貰つてゐた。それから大學へ入つたんです。大學で私は相識になつて、極く親密にしてゐました。其時分の事は他日お話を爲ます。今日はいけない、それから彼男は外國へ往きました……」

レヂチフは相變らず座敷の中を歩き廻つてゐる、それをアレクサンドラは目て以つて送りつ迎へつしてゐる。

レジチフは言葉を繼いて、「外國へ往つてからは母親の方へは餘り音信もしなかつた、尤もたつた一遍歸省したつけが、それも十日間ばかりて……母親は留守中に歿なつて他人が死水を取つたですが、息氣を引取るまて息子の肖像から眼を放さなかつたといふことて。

私は某地に住まつてゐた頃、屢次見舞てやりましたがな、善い人て、人が尋ねると大層喜んて、妄に櫻子の甘露煮を喫べろ〳〵と云つて侑める。ミーチャルーヂンの名なやが如何も可愛くッて可愛くッてならないてすな。ベチョーリン一流の人は常に情愛の薄い者

ほど深く愛するものだといふが、私の考ては母親といふものは我子の中ても殊に離れてゐる者を愛する傾がある。其後外國てルーヂンに逢つたことがあるが、其時分ルーヂンは去る貴婦人と浮名を立てゝおつた。貴婦人といふのは矢張露西亞の者て、青足袋連（改革派を云ふ）ださうだが、最う相應の年齢で、餘り美しくもなかつた。併し青足袋連に限つて皆然うしたものてすな。大分長い間此女に關係してゐたが其内に見捨てゝ了つた……いや、然うてない、見棄てられたんだつけ。私も其頃ルーヂンと分れて了つた。これて大團圓てす。」

レヂチフは話し了ると、額を撫てゝ、さもがつかりしたやうに肱懸椅子に腰を卸した。

アレクサンドラが、「レジチフさん、貴下は餘程人が惡いよ、本當にビガーソフに輸けないよ。それは貴下のお話は眞實でせうさ、何も僞は仰しやるまいけれども、然う云つて了つては花が散るわ、老母さんが可哀相だつたの、大層愛がつてゐたの、他人に死水を取られたの、貴婦人に關係したのッて……其樣な事は云はんでもの事ですわ……立派な人の身の上でも、些ともお誇言を附けずに――可うございますが、些ともお誇言を附けずにですよ――厭に云つて了ふことが出來るもんですよ。それも矢張讒謗の類ね。」

レジネフは起上つて又座舗の内を歩出したが、頓て「私は厭に云はうとは些とも思はん。私は人を讒謗するやうな男ぢやない。」少し考へてから、「が、併しそれは眞に、貴女の仰しやる所も幾分か道

理かも知れん。私はルーヂンを讒謗したのぢやないが、事に寄ると彼男もそれから變つてゐるかも知れん――それは何とも云はれんですな！――私の思ふ所は偏頗かも知れん。」

「ぢや斯うしませう……貴君がルーヂンさんと最う一遍知己になんなすつて、善く先方のお肚裏を洞見いてから、最後の所を仰しやい。ね、それが可いでせう？」

「宜しい、然うしませう……それはさうと、君は何故然う默つてゐる？」

ワルィンツォフはびくりッとして面を揚げた。眠りかけた所を覺されたとてもいふやうな鹽梅である。

「何と云ひやうもないものゝ僕は彼男を知らんから。それに今

日は頭痛がして……」

「眞に然う云へば今日は何だか顏色が惡いやうですよ。どうぞ爲すつたの？」

「頭痛がします、」と同じ事を云つて、ワルィンツォーフは座舗を出て了つた。

アレクサンドラとレジチフは後を見送つて面を視合したが、互に何とも云ひはしなかつた。ワルィンツォーフが如何いふ心持でゐるかは二人とも知らんてはないのである。

（六）

二月餘り經つたが、此間ルーヂンはダーリヤの家に殆ど居ずくまりであつた。ダーリヤは最うルーヂンでなければ夜も日も明けぬ。ルーヂンを捉へて自分の噂をしたり意見を聽いたりせぬては如何も居られぬ樣になる、或時ルーヂンが懷淋しくなつたからとて歸らうとすると、ポント五百ルーブル出して呉れた。ルーヂンはワルィンツォーフにも二百ルーブル許借りてゐる。ビカーソフは目切り足を遠くした。ルーヂンに氣壓されたので。尤もそれはビガーソフばかりでもないが。

ビガーソフは此樣な事を云つてゐる、私は彼才子は嫌だ。厭に

物を云ふ、宛て小説中の人物か何ぞの様に、志んみりとなつて私は
といふ……私は、私は……つて長口上を並べ立てる。一寸嘘
てもすると、直ぐ何故嘘をして咳をしなかつたと、その理由を説つ
て聞かせる。人を賞るにしても、宛て官職でも授けるやうに大げ
さにいふ。大層自分を擯斥して我と我を叱飛すから、大方最う人
に顔は合はされまいと思ふと、如何だらう！　浮かれて騒出すほ
どだ、宛て苦い酒をかッ飲つたといふものだ。」

バンダレーフスキイはルーヂンを憚つて怯る〳〵機嫌を取て
ゐる。ワルィインッォフとルーヂンとは奇異しな關係で、ルーヂ
ンはワルィンッォーフを俠氣が有ると云つて、蔭でも眼の前でも
賞讃す。けれども、ワルィンッォーフにはルーヂンがどうも氣に

喰はぬ。眼の前で喋々しく稱立てられる毎に、覺えず氣が苛立つ
て忌々しくなる。「彼樣な事を云つて余を嘲弄してゐるのかも知
れん、」と思へば、むら〳〵とすることもある。幾度か氣を取直して
見ても、どうも妬ましい。尤もルーヂンとても、ワルィンッォーフ
の面を視ると毎も喧ましいほど愛想を云つて、俠氣があると推奬
げて金を借りる算段をするやうなものゝ、餘り好いてゐるとも思
はれぬ。此二人が親しらしく手を握合つて眼と眼を視合せる時、
互に如何樣な心持がするか一寸解らぬ。

バシストフは相變らずルーヂンを神佛のやうに敬つて、その云
ふ事を一々耳に住めてゐる。ルージンはバシストフには餘り氣
を留めぬ。尤も如何かして一朝一所に居て、人生の大事を語合ひ

てんと堪らぬ氣にならしたともあつたが、其後は棄てゝ見返りもせぬ……清い心を打込むで陷まる人に遭ひたいといふのはそれはほんの口頭ばかりと見える。レジチフはダーリヤの家に出入をするやうに成つたけれど、ルーヂンは之とは議論を闘しだにせず、何となく避け氣味にしてゐる。レジチフも亦ルーヂンとは餘所々々しくしてゐるけれど、判然としたことゝも云はんので、アレクサンドラは彷徨してゐる。ルーヂンを崇めてゐるけれど、レジチフは信じてゐるのである。ダーリヤ一家の者は皆ルーヂンの思ふ通りになつて。聊かの望でも叶はぬといふことはない。

遊山仲間

晝間の業務もルーヂン次第で順が定る。如何なPartie de Plaisirでもルーヂンを入れずに組むだことはない。けれども、ルー

ヂンは俄に思立つて遊びに出たり慰みを企圖むだりすることは餘り好まないから、然ういふ仲間に入つても、大人が小兒の遊びに交つたやうに莞爾はしてゐながら少し退屈さうにも見える。其代り何事にも首を突込む、地所の差配やら、小兒の教育やら、家内の始末やら、凡そ一家の事に就いては主婦の相談相手になつて、其意見を參酌して、頂細な事にまで立入つて、いろ〳〵の改革を勸め、計畫を立てる。ダーリヤはいつも至極尤もと同意はするが、それは口先ばかりで、卒となると常も執事の意見に從く。執事といふのは小露西亞の者で、隻眼の、氣の長い、それでゐて中々横着な老人であるが、毎も一しかない眼を細くして「年を喰はなければ、味は出せん、若い内は肉のないもので、」と云つて、ニヤリとする。

主婦を除いてはルーヂンは一番ナターリヤと話を屢くする、而して長く話してゐる。内々て書物を貸したり、思立つた事を打明けたり、書きさした文章の初の方を讀むて聞かせたりするが、ナターリヤには毎々其意味が解りかねる。けれども、ルーヂンは解らぬとて、それには餘り頓着せず、唯聽いてさへ居ればそれで可いと云つた樣な樣子てある。ナターリヤがルーヂンと親しくするのがダーリヤには餘り香ばしくない。けれども、「田舍だから、まア仕方がない。大方子供で面白いのだらう。大した害も有るまい、それに彼樣いふ人と交際するのは畢竟彼娘の利益になる事だから……併しペテルブルグへ往つたら、かうはさせまい……」などと思つてゐる。

けれども、ダーリヤは思違をしてゐる。ナターリヤは子供になつて話をしてゐるのではない。心を籠めてルーヂンの話を聽いて、その深意を探らむとするともあれば、自分の思ふ所疑ぶ所を打明けて敎を請ふこともある、ルーヂンはナターリヤの師とも手引とも頼むものてある。當座は唯智慧のみが働く……けれども若い者の智慧は何時までも獨りて働いてゐるものてない。庭の秦皮の影のぼんやり斑に射す所で、捨牀几に腰を掛けて、ルーヂンがギ■ーテのファウストや、ホフマンや、ベッチンの手紙や、ノワーリスを讀みながら、意味の解しかねる所へ來ると、讀みさしては講釋をする、それを聽いてゐるその面白さ！　此國の處女は誰も然うてあるが、ナターリヤも獨逸語で話をさせると下手な代り、解る

てとは善く解る。然るにルーヂンは獨逸の詩に魂を打込むで、縹渺とした際涯のない處を泳廻る男であるから、ナターリヤも何時しか釣込まれて然ういう俗物禁制の境へ入る。心を込めて視てゐると、曾に見たとの無い美しい天地が眼前に開けて、ルーヂンが手に持つてゐる書物の中から、眼覺しい心象やら、鮮かな新思想やらが眼に視えぬ泉となつて湧出でゝ混々と心の中へ流込むと、生變つたやうな心持がするので、たゞ辱けなさに胸が一杯になつて大歡喜の神火がぷす〳〵と燻つて遂にぱつと炎上る。……

或時ナターリヤが、窓際で繡架に對つてゐたが、ふとルーヂンに向つて、「テノ貴下も冬籠にペテルブルグへ往つしやるのでせう？」

「如何しますか知らん」とルーヂンは繡げてゐた書物を膝に措い

て、「慎中の都合で往けたら、往きませう。」

物を云ふのも懶けてある。何となく力脫がしたやうで、今朝から何もせずにゐる。

「往けないと云ふことは有りますまい？」

ルーヂンは首を振つて、

「それは然う思はれるでせうが……」

と理由ありさうに向ふを凝然と視詰める。

ナターリヤは何か云はうとして耐へて了つた

「あれを御覽なさい、」とルーヂンは窓外を指して、「あの林檎ですな、あれは實が澤山結つたので其重みて折れたのでせうが、天才の有る者も恰ど如彼ものですな……」

「支へるものが無いから折れたのでせうね……」

「成程、然うでせう。けれども、それが、其支へといふものが容易に見付かるものでないです。」

「でも人の同情は……なんても獨棲は……」

と少し亂次になつて、顏を赧らめて、

「田舍で冬何を爲すつて？」

と狼狽て言葉を足す。

「田舍でですか？　一昨日貴嬢に腹稿をお話したでせう、あの論文を――人生と美術との悲壯を論ずといふのを、隨分長くなるでせうが、あれを書かうと思つてゐます――出來たらお眼に懸けませう。」

「印刷なさるのですか？」

「否」

「何故なさらないの？　それぢや誰の爲めにお書きなさるのだか分らなくなるぢや有りませんか？」

「さア、まア、貴嬢の爲に書くと思つても宜しい。」

ナターリヤは差俯向いた。

「私などが拜見したつて解りは致しません。」

「お話の中だが、何の論文です？」とバシストフが怯る〳〵問く。

離れた處にゐたのである。

「人生と美術との悲壯を論ずといふ、とルーヂンは題を反覆して、

「然う〳〵、バシストフさんも讀むで下さるでせう。だが、未だ私に

は文の骨子となる思想が十分に手に入らんから不可、戀愛の悲壯の處が全然了解んから。」

ルーヂンは往々戀愛の話を始める、また好きである。初めの内は M-lle Boncourt も戀愛と聞くと駭然として耳を聳てゝ軍馬が喇叭の音を聞附けたやうな面をしてゐたが、其内に慣れて了つた。唯其話が始まると、口を尖らせてへたくた烟草を嗅ぐばかりで。

「戀愛の悲壯の處は戀のかなはない時ぢやありますまいか？」

と怯づ〳〵ナターリャが云ふと、

「いや、然うぢやない！　それは寧ろ戀愛の滑稽な處で……然う云ふ風に考へては不可、最と深く入らなくては……戀愛！　不思議なものですなア？　何處からともなく起つて來て、漸々に

發展して、而して消滅して了ふ。突然明るくなつたやうに華やかに起つて來ることもあれば、灰を被つた火のやうに多時も燻ぶつて、事情の綾が解れてから炎となつて燃上ることもある。また蛇の這込むやうに心の内へ這込むて、ふと滑出て了ふこともある……

……實に不思議なものだ、研究の價値は十分にある。けれども今時戀愛なんぞしてゐる者は有りませんな。戀愛し得る程の氣力を誰も持つてゐないから。」

と考へ込んだ、

「ワルィンツォーフさんは久しく見えんぢや有りませんか？」

と突然いふ。

ナターリャはパッとして繡架へ屈みかゝつて、

「如何したのですか。」

と小聲に云ふ。

ルーヂンは起上りながら、「あんな立派な人はない。彼人こそ眞の露西亞の貴族を代表してゐる人で……」

M-lle Boncourt が佛蘭西風の横眼を遣てルーヂンの樣子を視る。

ルーヂンは座舗の中を往きつ戻りつしてゐる。

急に踵でぐるりと廻つて、「樫の――樫は堅い木ですな――樫の葉は若いのが芽を出す時分でなければ古いのが落ちませんな。」

「然うですねえ、」とナターリャは思切り惡くいふ。

「しつかりした人の戀愛も然うしたもので、古い戀は最う枯れ枯れになつてゐる、けれども尙ほ附着てゐる。

たゞ別に新しい戀が芽を出すのでなければ散らん。」

ナターリャは何とも挨拶をしなかつた。

「何て彼樣な事を云ふのだらう？」と心の中で思つてゐる。

ルーヂンは立止つてゐたが、ぶる〳〵と頭髮を振つて座舗を出て了つた。

ナターリャはナターリャで部屋へ戻つて來て、久らく茫然として寢臺に腰を掛けて、ルーヂンの最後に云つた事に思ひ入つてゐたが、ふと拳を握固めて、飲泣て泣き出した。何が悲しいのか――解らん。自分ながら何故かうふいと泪が出て來たのか解らん。

拭いても〳〵も後から出て來る、沸々と湧上る泉の水の溢れて流れるやうに止度なく出て來る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

恰ど其日の事、アレクサンドラはレジチフとルーヂンの噂をした。レジチフは初の内は何と云つても、相手にならなかつたが、何分にもアレクサンドラが承知しなかつた。

「どうもルーヂンさんは今ても矢張貴下のお氣に入りませんね？　私は今まで故意と何にも伺はずに居たけれど、最も貴下にも彼人が變つてゐるかゐないか、大概解りましたらうから、其理由を仰しやい、何故彼人がお氣に入らないのか。」

レジチフは例の通り平氣な調子で、「宜しい。そんなに氣が揉めるなら云つて了ひませう、併し怒つちや不可ませんぜ……」

「まアさ、仰しやいよ。」

「而して結末まで默つて聽いてお居でなさい。」

「はい〳〵畏まりました。さア、何卒。」

「ぢや云つて了ひませう、」と胖に長椅子に臀を落着けて、「成程ルーヂンは私には氣に喰はん。それは彼男は賢い……」

「當然さ、貴下！」

「なか〳〵賢いが、併し詰る所たわいが無い男だ……」

「まア、口に年貢が出ないと思つて！」

「たわいが無い男だ、」と同じ事を繰返して、「併しそれはまだ宜しい。吾々は皆たわいの無い人間だから。それから彼男にはまだ缺點が有るが、それも私は左程の事とも思はん、といふのは内心壓制家で、懶惰で餘り學識もなくつて……」

アレクサンドラは手を拍つて、

「學識がないッて！まア、驚いた！」

と喚く。

「餘り學識もなくて、」と同じ調子でレジチフは繰返して、方々喰倒して歩いて、氣取り散らしてゐるが、これは然うありさうな事だ。併し彼男は氷の如く冷い、それが宜しくない。

「まア、あんなに情のある人を捉へて冷たいなんぞッて！」

「さうです、氷の如く冷いです、而して自分もそれを承知してゐながら、情の厚いやうな面を被つてゐるです。甚だ宜しくない、」と次第に乗地になつて來て、「危ない眞似をするから宜しくないです——危ない眞似と云つても、勿論彼男に危ないのぢやない、自分は一

文だつて賭けちやゐないが、相手は命を賭けてゐる……」

「何を云つて居らつしやるんだか、些とも解りませんよ。」

「彼男は正直でない、それが宜しくない。賢いなら、自分の云ふことに何程の價値が有る位は解りさうなもんだが、それでゐて何か仔細らしく勿體を付けて饒舌つてゐる……勿論彼男は雄辯で、併し露西亞人の雄辯ぢや有りませんね。それに若い者なら雄辯を弄するも仕方がないが、あの年頃になつて自分の舌の動く騒がしい音を聽いて、それで嬉しがつて氣取つてゐるとは氣羞しい事ぢやありませんか？」

「でも氣取らうが、氣取るまいが、聽者には關係がないぢや有りませんか？……」

「いや、然うでない。同じ話でも、或人の口から聞くと腸に染みるけれども他の者がそれよりは最と上手に云つても、耳も傾けないことがある何故でせう？」

「それはあなたが耳を傾けないばかりですわ。」

「耳も傾けない――尤も私の耳は少し大きい方かも知れんが、一口に云へば、ルーヂンの話はいつまでも話で、曾て所爲になつた例がない――所が其話で以て隨分若い人の心を迷はして生涯を誤らせることが出來る。」

「若い者〳〵ッてまア誰の事？」

「誰の事？解りませんかねえ。ナタリーヤさんの事でさ。」

アレクサンドラは一寸狼狽た樣であつたが、直と笑ひだした。

「まア、飛でもない！……貴下はいつても奇異なことを仰しやるよ。ナタリーヤさんは未だ赤兒でさアね、それに假令へば何かをかしな事があつたにしろ、ダーリヤさんが附いてゐれば……」

「さア、そのダーリヤさんが我儘者で自分にばかり拘けて居るから困る。それに兒女の教育に掛けては自分程のものはないと思つてゐるから、少しも苦にしてゐない。何て其樣な事があるもんかと思つてゐる。自分が一寸一つ容體ぶつて目交をすりや、何も彼もすら〳〵と思ふ通りになると思つてゐる。そんなもんでさ、彼女の思つてゐることは。私は美術家の守本尊だとか、賢いとか、何とか云つて己惚れてゐるけれど、實は尋常の老婆さんで取得と云つては交際の廣い位のものですからね。それからナタリヤ

さんだか、彼娘は赤兒ぢやない、我儕よりか能く考へてゐる、それに考が深い。かうした正直な熱情を持つてゐる者が彼樣な俳優じみた手練師に逢着るとは全く不運さね、併しそれも異しむには足らん事かも知れんが。」

「手練師つて、彼人がそんな手練師ですか？」

「手練師てすとも……まア、積つても御覽、彼男は一躰ダーリヤさんの家て如何な事をしてゐます？　家内の偶像となつて、豫言者のやうに持囃されて、家事の取捌や家内の紛紜にまて首を突込む――そんな事が果して男兒の爲べき事てせうか？」

アレクサンドラは呆れてレジチフの面を視詰めた。

「まア、不思議な！　貴君が顔を赧くして、いきりだして……何

ぞ是には謂くがあるんだよ……」

「あれだ！　女といふものは是だから厭になつちまふ！　人が己の信ずる所を眞直に話をすれば、然ういふのには何か仔細があるだらうと云つて緣の無い瑣末な原因を拵らへなきや、承知が出來ないんだ。」

アレクサンドラは怒りだした。

「いえ、どうも御道理さまてすよ！　貴下は女を虐めだしましたね。ビガーソフさんに輸けませんね。だつて、なんぼ貴下が眼が高いつて、僅の間にさう何も彼も全然見て取られるもんぢや有りませんやアね。屹度思違をして居らつしやるんだよ。貴下の仰しやるやうぢや、ルーヂンさんは宛然タルチューフか何かのやう

になつて了ひますもの。」

「さア、其處だて、ルーヂンはタルチューフにも劣る。タルチューフはそれても自分て何を求めてゐたか知つてゐたけれど、ルーヂンは才はあつても……」

「才はあつても如何したんてす？　と云つてお了ひなさいと云へば。本當に貴下は根情曲りの厭な人だよ！」

レジチフは起上つた。

「根情曲りといふのは貴女の事て、私の事ぢやない。餘りルーヂンの事を酷く云ふもんだから、それて貴女は腹が立つんだらうが私は酷く云つても宜い權利を有つてゐる――考へて見ると、高い代を拂つて此權利を買つたやうなもんだが。何しろ私は久らく

一所に居たから彼男の腹はちゃんと洞察いてゐる。何てしたな先達て貴女にマスクワに居たころの話は他日すると云つて約束をしましたけな。かうなると其話をしなければならぬ機會になつて來たが、貴女は結末まて聽いてゐられますか？」

「是非伺ひませう。是非！」

「ては、しませう。」

レジチフは緩々と座敷の内を歩きだしたが、をり〳〵立止つては屈身になる。

「話に、貴女は御存じだか、御存じてないか知らないが、私は極の小兒の時に兩親を喪して了つて、十七の時には最う頭の押手がなかつたんてす。マスクワの伯母の家に世話になつてゐたのだが、

何でも氣隨にしてゐました。青年頃には私は隨分くだらぬ負けぬ氣の奴で、加之氣取屋のみえばうだつたが、大學へ入つてからはグッと書生風になつて了つて忽ち艶聞の種を蒔いた。尤も是はお話しにもならん事だから省略つて了ひますが、其時私は皆に一杯喰はしたんだ。それも宜いが、その喰せかたが些と手酷かつたもんだから、朋友めが寄つて集つて洗ひだてをして、明るみへ引摺出して、恥を與したので私は途方に暮れて子供のやうにおい〳〵泣きだした。何でも去る知己の家で、大勢朋友の居る處でやられたんですが、皆があはゝ笑つてゐる其中で唯一人――それが其癖私が强情を張つて、おらを切つてゐる間は一番憤激となつてゐたのだが、さうなつて見ると氣の毒とても思つたと見えて、私を引張

つて、自分の所へ連れて行つたてす。」

「それがルーヂンさんなんてせう？」

「いや、ルーヂンぢやない。此男は最う死て了つたが、非常な人物てす、パコールスキイといふ人てす一寸如何いふ人と一口には云つて了はれない程の人物で、此男の話を始めると、最う他の者の話なんぞは厭になつて了ふ。高尚で、純潔で、あんな頭腦は滅多には有りませんな。古い木造家の中二階みたやうな所の天井の低い狹い部屋を借りてゐたつけが、非常な貧乏で、出稽古をしてかつ〳〵凌いでゐたてす、だから客が來ても茶一杯振舞ふことが出來んこともあつたてすな。唯一脚しかない長椅子も甚く壞れてゐるので、一寸見ると小舟か何ぞのやうだ。そんな家てもなか〳〵人出

入が多い。どうも皆が慕ふ、懐かしがる。尤もそんな哀れ果敢ない部屋でも、其處に居るのが如何なに快い心持で面白かつたでせう！　私は此人の所でルーヂンと相識になつたのだが、其頃ルーヂンは最う侯爵どのとは縁切になつてゐたのです。」

「そのパコールスキイといふ方は何處が好くつて皆がさう騒いだんです？」

「さア、何と云つたものかな！　優しくて儼然してゐる――それが皆の氣に入つたんでせうな。曇のない廣大な智慧を持つてゐながら、子供のやうに愛度氣なくて可愛らしい處がある。快闊にあはゝ笑ふ聲が何だか今だに聞えるやうな心持がする、それでゐて、

神に供へし御燈と
心細くも夜を守る

といつたやうなこともある。これは矢張我黨で詩人と謂われた半狂氣の面白い男がパコールスキイを謔つた文句です。」

「辯舌は如何でした？」

「機嫌の善い時には仲々巧に話をしたが、驚く程ぢやなかつた。其時分でもルーヂンの方が十倍も雄辯でした。」と立止つて腕を組むで、

「パコールスキイとルーヂンとは餘程違つてゐます。ルーヂンはけば〳〵しい性質で、何事にも口が先へ立つて、事に寄ると狂熱も餘計有るかも知れん位で一寸見た所ではパコールスキイより

迫か立優つてゐるやうではあるが、實は比べものにならんので。或想を捉へてそれを言摧すところは仲々巧い、それに議論も巧者だが、其想といふのが自分の頭腦で產だした者ではなくつて、多くはバコールスキイの說を燒直したので、借物です、バコールスキイは見た所では靜な優しい人で、柔弱かとさへ思はれる程だが、馬鹿に女好きで、酒も飲めば、喧嘩もする。ルーヂンは熱血があつて勇氣があつて活潑に見えるけれど、內心は冷かなもので、少し臆病です、尤も恥を與されると、無茶になつて了ふけれど。而して種々にして人を心服させやうとする。原則とか概念とかいふものを揮舞して人を威すから、ルーヂンに敬服してゐたものも仲々ありました。けれども誰も愛してはゐなかつた、ルーヂンに親しむだ

のは私一人位なもんでしたらう。皆壓服されてゐたのですな……けれどもバコールスキイには人が自然と懷く。その代りルーヂンは誰に向つても講釋をする、誰とでも議論を鬪すことを辭さない……餘り書物を讀むではゐないが、バコールスキイよりか讀むでゐる、我儕は勿論敵はない。それに秩序のある頭腦で記憶も非常に强いから、青年ならソラ感心して了ひます。何でも青年に向つては最後の斷案を持出すに限る、間違つてゐても可いから斷案を持出すが可い！　極の正直者はかういふ事は出來ませんがな。何故なら、青年に向つて自分にも善くは分らないから確な事は云へないと云つて御覽……誰も此方のいふことを聽いちやゐない。併し徹頭徹尾欺すことも出來ないから、自分も幾

分か確だと信じて話をしなければならん。ルーヂンが大に我輩青年を動かしたのも其所爲かも知れませんな。今お話した通りルーヂンは餘り多くは書物は讀むでゐないけれども讀むだのは皆哲學書で、それに一種の讀書眼を持つてゐるから、讀むと直ぐ要領を捉へて、議論の根本となる思想を掴む、而して其思想から美妙な絲を八方へ亂はらぬやうに引出して眼に見えぬ畫幅を織出すのです。其頃の仲間と云つたつて實は皆小兒てさ――未だ修業中の小兒ばかしてさ。だから、哲學だの、美術だの、科學だの、人生だのと云つた所で、我儕には尋常の言語に過ぎん、善くした所で、唯然ういふ概念がある位のものだ、尤も派手な一寸眼に附く概念だが、一々ばら〳〵になつてゐて其間に連絡がない。此概念を一貫す

る原則といふものに至つては、始終手探りていろ〳〵說を立て、解釋を試みたけれど、どうも慥な事が解からない……ところが、ルーヂンの說を聽いて見ると、始て其一貫するものに逢着たやうな何だか隔ての幕でも除れたやうな心持がする！　それはルーヂンの云ふ所は皆取次でせうが、取次でも何でも關はない！　我儕の知り得た所のものが總て井然と整理が附いて、零々碎々のものが俄に連絡つて完整つて、儼然と樓閣の如く目前に現はれて、八面玲瓏として、眼を遣る所に生氣が躍つて見える……天地間に無意義のもの偶然のものが無くなる、萬物に必然と靈妙とが浮いて見える、總て意味が判明すると同時に奥妙不可思議となつてそれぞれの、現象も自ら調子が整つて見える。又我儕とても常住の眞

理を宿した生身で、謂はゞ眞理の道具のやうなもので、何か大した運命を身に負ふてゐるやうに思はれて、難有やうな、怖ろしいやうな、妙な氣持になつて、頻に胸が逼つて來る……こんなことを云つても可笑くはありませんか？」

「いゝえ！」と引張るやうに云つて、「何故ね？　何故そんなことを仰しやるか知らないけれど、可笑くはありませんよ。」

「其時分から見ると私共も幾分か利口になつた、」と話し續ける。「今から其時の言を考へると總て一場の兒戯に過ぎない……併し、今も云つたやうに、其頃は私共もなか〳〵彼男のお蔭を被つたものです。それはパコールスキイはルーヂンの如きものでない、無論えらい。私共の氣を興奮さして火を胸に焚かしたのは此人

だ。けれども、神經質の贏弱な人であつたから、時としては萎れて默つてゐることもある。その代り一たび皷翼をすると非常なもので、九天の上へまで飛て行く！……けれども、ルーヂンとなると、外見は立派な青年だが、隨分可卑な所も有つて、無い事も有るやうに云つて他を讒謗するとさへある。それに何處へでも首を突込むで、何でも鑑定をして說明したがる。いつも齷齪と突廻つて些とも落着いてはゐない。どうも政治家の天禀ですな！　其頃は然うであつたから、其通りと云ふのだが、情ないことには今も變つてゐない。その代り自分の思想も變つてゐない。三十五になるのですぜ……三十五にもなつてさ、思想の變らん者もないではないが、澤山は有りませんね。」

「まア些とお掛けなさいな。何故然う動いてばかりゐらつしやるのだらう。宛て時計の振子玉のやうだよ。」

「此方が勝手です。そこでパコールスキイの連中へ入つてからは私も再生つたやうになつて、温順しくもなれば、勉強もしました、不審を質して喜ぶやら、難有がるやら――宛て寺入てもしたやうな始末さ。けれど、實際連中の集つた時の事を憶出して見ると、それは中々感心な優らしい所がありましたよ。まア、五六人少年が集つたとお思ひなさい。脂蠟燭が一本點つてゐて、おツそろしく粗い茶に古臭い陳たやうなビスケットが出る。ところで皆が如何な面色をして何を話してゐるかと云へば、鎔々眼には喜の色を浮べて頬には火を焚いて、胸をときめかせて神だの、眞理だの、美だ

の、人間の未來だのといふ事を談じてゐるのだ――尤も時としては愚ぬ事を言つて詰らん事に感心するともあるけれど、まうだと云つて何ぞ相病むに足らんさ……パコールスキイは足を引込めて、蒼ざめた頬を手で支へて座つてゐるが、眼がおそろしく光つてゐる。ルーヂンは部屋の中央に突立つて年のいかぬデモスフェンがどうどつと鳴る海に對つたやうな風をして喋舌つてゐる滔々と喋舌つてゐる。頭髪を蓬に亂した詩人のスッポーチンが折々囁語のやうに斷つたやうな大きな聲を立てる。獨逸の牧師の息子でシェルルといふ四十男は極の寡言で滅多に口を開いたことのないので、皆がえらい思索家のやうに謂つてゐる男だが其男は相變らず口を閉ぢて、何となく眼立つほど位を取つて默つ

てゐる。我傳仲間のアリストファンと謂はれたシチートフといふ氣輕男も大層大人しくして唯莞爾々々笑つてばかりゐる。二三人の新參も居たが、是等は大歡喜に滿されてぞく〳〵しながら話を聽いてゐるといふもので……夜は蕭然として知らぬ間に更る。其内に頓て東が白むころになつて散會するのだが、皆感激して眞面目になつて、其時分は酒と云つては一水も飲まなかつたから白面で、而して疲れてゐるから心持善く恍然としてゐるのでず……今でも憶ひだしますがな、優らしい氣になつて、人一人通らん森閑とした町を通つて行く。星を視てさへ何となく懐かしいやうな氣がするが、そんな時には星も間近く見えて、その意も解るやうな心持がしまさ……あゝ考へて見ると彼時分は面白か

つたなーどうも彼時分の事を昔の夢にして了ひたくないが併し實際夢にもならんですな――それから後浮世の垢に汚れた人が ら見ても……其證據にはさういふ以前の朋友に幾人も逢つたことが有るが、皆人間が宛で畜生じみて了つてゐるけれども其前で一寸バコールスキイの名をいふと、少しばかり殘つてゐる人間らしい處がむくむくと頭を擡げて來るから譬へて云へば、まア汚い暗黑な座舗で取遺してあつた香水の壜の栓を脱いたやうなもので……」

とレジチフは默つて了ふ。蒼い面が今は赧くなつてゐる。

「ですが、如何して貴下はルーヂンさんと仲違をなすつたの？」とアレクサンドラが不思議さうにレジチフの面を視た。

「いや、仲違をしたのぢやない、たゞ外國で逢つた時彼男の腹を全然洞見いて了つたから、それで疎々しくなつて了つたんです。喧嘩を仕やうと思や、マスクワに居た時に仕まさ、酷い眼に逢はせたからな。」

「どんな眼に」

「どんな眼と云つて……私は……何と云つたもんかな……

……柄に無いことだが……私はソノ一躰人に惚つぼかつたてす。」

「貴下が？」

「私が。ナント奇妙ぢや有りませんか？　けれども、實際然うだつたんです。それで其時分私は去る可愛らしい娘に惚れてゐて

ね……何故然う人の面を御覽なさる？　これしきの事は何でもない、最と不思議な事もある。」

「如何な事、それは？」

「その、何です。私は其時分マスクワに居た頃さね、毎晩逢に行つたものがあるが、何に逢に行つたと思ひます？　庭園の端に菩提樹の稚木があつたが、それに逢に行きましたな。菩提樹の細いすらりとした幹を擁へると、宛て天地を擁へたやうな心持がして、氣が大きくなつて、恍惚として實際萬物が胸の内に入つてゐるやうな氣がする……然ういふ私は男だつたし！……如何てす！貴女は私は詩なんぞ作つたことはあるまいと思ひませう？ところが、作りましたな、而もマンフレード張の、ドラマさへ一つ書いた

位だ。出て來る人物の中には胸を血に染めた幽靈もあるんだが、其血がさ、自分の血ぢやなくて、總ての人類の血なんだ、何も然う驚くとはないです……併し肝腎の話が何處へか往つて了つた。

そこで私はさる娘と相識になつた……」

「而して菩提樹と逢引するのはお止なすつた？」

「それは止ました。で、その娘といふのは極氣立の善い姿色の善い娘でした、はつきりした涼しい眼付で、徹る聲で……」

「大層形容がお上手ね、とアレクサンドラは莞爾する。

「そんな皮肉を云つちや不可。で、その娘は年を取つた父親と一所に居たのだが……併し委しいことは止めませう。たゞ實際氣立の善い娘でした——茶をコップに半分呉れろといへば、屹度

八分目注いで呉れるといふ程善い娘なんだ！……初て逢つてから三日目には私は最う上氣て了つて、七日目には我慢が仕きれんで、到頭全然ルーヂンに打開けて了つた。若い者が惚れたとなつたら、最う默つてはゐられんのですからな、それで私もルーヂンに全然白狀して了つたんです。其時分は全でルーヂンに感化てゐたんだが、また感化てゐて利益を得たことも多かつた、それは然うに違ないです。ルーヂンは私を輕蔑しなかつた、愛してゐて呉れました。私は深くパコールスキイを愛してゐたけれど、何分彼が餘り純潔なので、其前へ出ると幾分か怯れが出る、けれども、ルーヂンには氣が置けない。で、ルーヂンは私の懺悔を聞くと、おそろしく喜んで、私に抱付いて、お目出度の百も云つて、それから早速忠

告を始めた、私が容易ならん身分になつたと云つて、その理由を説明しだしたが、御存じの通りの雄辯だから、私も耳を傾けた。て、どうも非常に感動する。それから自分ながら我身が大切になつて眞面目な顏色をして高笑もせんやうになつた。今でも憶出しますがな、何でも其時分は歩くのにも徐と歩いたものだ、宛て腹の中に大切な水を一杯入れた器があつて、それを飜すと不可といつたやうな鹽梅で……どうも嬉しかつた、それに敵も滿更でないのは判つてゐたから尙更嬉しかつた。それからルーヂンが其娘と相議になりたいと云ひだしたが、これは尤も私の方から相議にしたいと云ひだしたのかも知れん……」

「へ、へえ成程、それで解りました。それぢや貴下はルーヂンさん

に横取されたんてせう、その情婦を、それて今になつても未だ恨みに思つてゐる……屹度然うに違ひないよ、賭ていつても可い！」

「賭なら輸だ。いや、然うぢやないてす。ルーヂンは横取をしたんぢやない、また仕樣とも思はなかつたが併し兎に角酷い目に逢はした、尤も今となつて落着いて考へて見ると、然うされて反つて幸かつたとも思ふが。併し兎に角其時は私も非常に弱はつた。ルーヂンは少しも私のため惡かれと思つたのぢやない——そりや然うぢやない！　けれども彼男は自分の事でも他人の事でもピンて蝶々を刺めるやうに言葉でぴつたり刺めたがる厭な癖がある。だから、私共を捉まへて、貴下がたは如何いふ心持てゐるの、如何いふ關係だの、如何いふ風にしてゐなければならんの、といふ

とを説明して、吾等の心の底まで敲いて全然言はせなければ承知しなかつた、而して褒めたり、叱つたりして、私共と密書の往復まで　した、如何です、密書の往復まで！……それて折角の情事も滅茶々々にして了つた！　私はそれでも未だ幾分か常識が殘つてゐたから、其娘と結婚はまづ仕なかつたてせうが、それてもバーウエル、ヴイルギーニャ氣取て面白をかしく二月三月送つたてせう。ところが然ういふ始末だもんだから、いろ〳〵行違がある、無理を爲る、――どうも降らん眞似をしたてすな。その中に一日ルーヂンて自分は親友であるから、親友の神聖なる義務として何も彼も情婦の親に知らせなければならんと云ひだした。それが話の拍子て然う云はなければならなくなつて云つたのだが、到頭その通

り做て了つた。」

「まア、本當に？」

「實際の話です。それがさ、私の同意を得て做つたのだから、妙てせう？……今から思ふと、其時分は頭腦の中が混沌かつてゐたんてすな。宛てカーメラ、オブスクーラの鏡を覗たやうに、總てのものがぐる〳〵廻をして追蒐け追廻すもんだから、黑白の差別も附かなくなつて、僞も眞實のやうに想はれゝば、妄想が義務のやうに想はれるのだ……いや憶ひだしても冷汗が出る！　けれども、ルーヂン――そんなことには一向驚かない……如何して！　どんな紛糾つた中ても、燕が地を掠つて行くやうに、スッと通つて行く。」